

新屋敷前遺跡

平成29年度社会資本総合整備(防災・安全)(一)石田川(上流工区)
河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

新屋敷前遺跡

平成29年度社会資本総合整備(防災・安全)(一)石田川(上流工区)
河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

群馬県太田土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

群馬県の南東平野部にある太田市は、いまや人口21万人を超える東毛地域の中核都市として位置づけられています。北に大きく裾野を広げた赤城山を仰ぎ、南に滔滔と下っていく利根川の流れに臨むこの開けた地形は、まさに関東平野の内懐ともいってよい景観を示しています。平成17年に合併して太田市の一部となった旧新田町は、この太田市の西側に広がる平坦な地にあります。鎌倉幕府を倒した新田義貞の本拠地として著名ですが、その祖である新田一族が新田荘を立てて、中世武士団の首領として勢威を張った場所でありました。さらに遡れば、古代には都と東国を結ぶ東山道駅路が走り、古墳時代には大規模開拓によって広大な水田地帯が造られました。現在の旧新田町域は、田畑が広がる中に大型商業施設や工場が点在する平凡な景観となっていますが、長い歴史のなかでは、その時々時代の像を反映した大きな舞台でもあったのです。

この度、報告することになりました新屋敷前遺跡は、この旧新田町域を流れる石田川の河川改修工事に伴って平成29年に小規模な発掘調査が行われました。調査の結果、縄文土器のほか、古墳時代の溝や祭りに使われた可能性のある土器群が発見されています。その成果をまとめた本報告書では、この地域における歴史の一断面を物語る確実な証拠を提示しえたと考えております。

本遺跡の発掘調査報告書を上梓するにあたり、発掘調査にご理解・ご協力を賜った地域の皆さま、群馬県県土整備部・太田土木事務所・群馬県教育委員会の関係者方々に、改めて御礼を申し述べます。また、本書が地域史研究の有益な一助として、多くの皆様に活用いただけることを願いつつ、序といたします。

平成30年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、平成29年度社会資本総合整備(防災・安全) (一)石田川(上流工区)河川改修工事事業に伴う新屋敷前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 新屋敷前遺跡の所在地は群馬県太田市新田町大根地内にあり、発掘調査の対象となった地番は以下のとおりである。
太田市新田町大根702-1、705-1、705-2、705-4、707-1、707-2、707-5番地
3. 事業主体 群馬県太田土木事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 発掘調査及び整理に関わった体制と期間は以下のとおりである。

<発掘調査>

調査担当 平方篤行(主任調査研究員)
遺跡掘削請負工事 技研コンサル株式会社
地上測量 技研コンサル株式会社
遺構写真撮影 平方篤行
調査履行期間 平成29年9月1日～平成29年12月31日
調査期間 平成29年10月1日～平成29年10月31日

<整理>

整理担当 齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)
整理履行期間 平成29年12月1日～平成30年3月31日
整理期間 平成29年12月1日～平成30年1月31日
デジタル編集 齊田智彦

6. 石器石材同定については飯島静男氏(群馬地質研究会会員)にお願いした。
7. 石器の観察と器種認定には津島秀章(資料課長)、縄文土器の観察及び型式認定には石坂茂(専門調査役)、土師器の観察と時期認定には徳江秀夫(専門調査役)、陶磁器の観察と時期認定には大西雅広(調査第1課長)の協力と指導を得た。
8. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
9. 発掘調査においては以下の関係機関から有益な助言と指導を賜った。記して感謝の意を表します。
群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会

凡 例

1. 本書で使用した遺構平面図の座標は、すべて世界測地系(日本測地系2000平面直角座標IX系)を用いた。挿図中の方位記号は座標北を示す。
2. 挿図縮尺は各図中に記載してあり、単位は遺構図がメートル、遺物図がセンチメートルで示してある。
3. 遺構名称は発掘調査時点で付けられたものを用い、変更していない。ただし、遺構断面測量基準点となるアルファベット名は報告書掲載の都合上で振り替えた。
4. 遺物番号は、種類を問わず連番とし、挿図・観察表・写真図版で共通する。
5. 土層の色調表記には、「新版標準土色帖2005年版」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。
6. 本文中で用いたテフラの略名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』(東京大学出版会)に従い、以下のとおりとした。

A s-Y P…浅間板鼻黄色軽石、A s-C…浅間C軽石、H r-F A…榛名二ツ岳渋川テフラ

H r-F P…榛名二ツ岳伊香保テフラ、A s-B…浅間Bテフラ、A s-A…浅間A軽石

7. 第3表「遺物観察表」で用いる胎土分類は以下の通りである。

縄文・弥生土器の胎土分類一覧

分類	特 徴
A1	中量の石英・雲母や長石・輝石・赤色岩片の粗・細砂や少量の珪質乳白色岩片礫・粗砂を含む緻密な胎土。
A2	多量の円磨度の進んだ石英や中量の花崗岩片・チャートの礫・粗砂と中量の長石・輝石や少量の雲母・角閃石・黒色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
B	中量の結晶片岩礫と珪質乳白色岩片や少量の雲母・輝石と灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
C1	中量の灰白色岩片・石英や少量の珪質乳白色・黒色岩片と輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。
C2	中量の灰白色岩片・粗～細砂や少量の珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂とチャート礫・粗砂を含む緻密な胎土。
C3	中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と中量の石英や少量の輝石・珪質乳白色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
C4	多量の石英や中量の輝石と少量の灰白色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。
D1	中量の輝石や少量の円磨度の進んだ石英・珪質乳白色岩片・軽石の粗・細砂含む緻密な胎土。
D2	中量の石英・赤色岩片・輝石や少量の珪質乳白色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。
D3	中量の円磨度の進んだ石英・輝石と少量の珪質乳白色・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。

※各分類はルーベ等を使用した肉眼観察による。

※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯	1
1. 発掘調査実施の経緯	1
2. 埋蔵文化財発掘調査の委託契約	1
第2章 調査の方法と調査経過	2
1. 調査の方法	2
2. 調査経過	3
3. 基本層序	3
4. 調査日誌抄	4
第3章 遺跡周辺の地形と歴史的環境	5
1. 遺跡周辺の地形環境	5
2. 周辺遺跡の分布	5
第4章 検出された遺構と遺物	11
1. 溝	11
2. 焼土	15
3. ピット	15
4. 土器集中出土箇所	18
5. 出土遺物	22
第5章 まとめ	30

報告書抄録

写真図版

挿図目次

第1図	新屋敷前遺跡発掘調査範囲図	2	第12図	1号・2号・3号・4号ピット	18
第2図	基本層序	3	第13図	遺物出土状況図	19
第3図	周辺地形と遺跡の位置	6	第14図	遺物接合関係図(1)	20
第4図	周辺遺跡分布図	8	第15図	甕No.30出土状況図	21
第5図	調査区と遺構分布図	12	第16図	遺物接合関係図(2)	21
第6図	1号溝の平面図と断面図	13	第17図	石器	22
第7図	2号溝の平面図と断面図	14	第18図	縄文土器及び弥生土器	23
第8図	3号溝の平面確認図	15	第19図	古墳時代の土器(1)	24
第9図	4号溝・5号溝・6号溝	16	第20図	古墳時代の土器(2)	25
第10図	4号・6号溝土層断面と4号溝の部分拡大図	17	第21図	古墳時代の土器(3)	26
第11図	1号焼土	18	第22図	新屋敷遺跡出土採集資料	30

表目次

第1表	新屋敷前遺跡調査及び整理工程	4	第3表	遺物観察表	27
第2表	周辺遺跡一覧	9			

写真目次

P.L. 1-1	発掘調査地の状況(北から)	4	2区ピットP1土層断面
2	矢太神沼の現況(北から)	5	2区ピットP2
P.L. 2-1	1区1面全景(南から) 左側に沿う石田川	6	2区ピットP2土層断面
2	1区基本土層 No. 1	7	2区ピットP3
3	1区基本土層 No. 2	8	2区ピットP3土層断面
P.L. 3-1	1区1号溝土層断面	P.L. 8-1	2区ピットP4
2	1区1号溝調査状況(南から)	2	2区ピットP4土層断面
3	1区2号溝土層断面(東壁)	3	2区土器集中出土箇所(西から)
4	1区2号溝(南から)	4	2区土器集中出土箇所調査状況
5	1区1号溝(南から)	5	2区土器集中出土箇所(北から)
6	1号焼土断面	P.L. 9-1	2区土器集中出土箇所北半(東から)
7	1区2面全景(北から)	2	2区No.26・28・49・67出土状況
8	1号焼土除去面	3	2区No.27・42・44・53・73・77出土状況
P.L. 4-1	2区2面全景(北から) 右が4号溝、左が5号溝	4	2区No.29・47・51・73・77出土状況
2	2区3号溝検出状況(南から)	5	2区No.22出土状況
3	2区3号溝土層断面	P.L. 10-1	2区土器集中出土箇所中央(南から)
4	2区3号溝調査状況	2	2区No.24・48・55・57・69・70出土状況
5	2区4号溝検出状況(南西から)	3	2区No.24・27・48・54出土状況
P.L. 5-1	2区4号溝全景(南東から) 右は5号溝	4	2区No.27・29出土状況
2	2区4号溝全景(北から)	5	2区No.58出土状況
P.L. 6-1	2区5号溝(南から) 左は4号溝	P.L. 11-1	2区No.30出土状況と断面
2	2区4号溝土層断面B-B'と土器出土状況	2	2区No.30出土状況
3	2区4号溝土層断面A-A'	3	2区No.25・49出土状況
4	2区4号溝・5号溝土層断面C-C'	4	2区No.52出土状況
5	2区4号溝・6号溝土層断面D-D'	5	2区No.61出土状況
P.L. 7-1	2区5号溝土層断面E-E'	P.L. 12	石器(No. 1・2) 縄文土器(No. 3~18) 弥生土器(No.19)
2	2区6号溝土層断面D-D'	P.L. 13	古墳時代の土器(No.20・22~31・44・73・74)
3	2区ピットP1	P.L. 14	古墳時代の土器(No.47~52・55・56・58・59・67・77)

第1章 調査に至る経緯

1. 発掘調査実施の経緯

群馬県東部の太田市を貫流する石田川は、矢太神湧水池を源とする延長13.6kmの一級河川である。石田川には八瀬川、蛇川、聖川、高寺川、大川の支流が分岐しており、各々の河川が太田市域の農業用水として利用されている。この水利の範囲は石田川圏域と呼ばれ、総合的な整備計画の対象となっている。石田川の河川改修は昭和16年から開始されているが、昭和22年のカスリーン台風以来、大きな被害をもたらした大型台風や豪雨が続かなかで、昭和29年に改修計画の見直しが行われ、新たな河川改修工事が順次実施され現在に至っている。

石田川本流の上流部は川幅が狭く、また周辺の開発が急激に進む中での地盤の浸水能力低下、排水路不足といった要因により、溢水が起りやすく、周辺家屋や農地への浸水被害が多い地域である。このような洪水被害軽減のため、平成13年に国の認可を受けた石田川圏域河川整備計画の一環として、この石田川上流域の2.87kmを施工区間とする築堤・護岸工事が計画された。なお、この石田川改修工事計画では、湧水池に近いためあってウグイ・オイカワ・メダカ・フナ・ドジョウなどの魚類、環境省の絶滅危惧種にも掲げられているナガエミクリ・カワヂシャ・カワモズクなどの水生植物が生育しており、地元住民の意見も取り込んだうえで、できる限り自然環境保全を重視した内容となっている。また史跡・遺跡があれば、それらの保全・活用を考慮した水辺空間の整備を旨とするものとなっている。

石田川上流域の改修工事計画地は石田川の流路に沿ったものであったが、水源周りの矢太神遺跡・矢太神沼遺跡をはじめ、流域には縄文時代から中世に至るまでの遺跡が分布しており、流路変更などの地形改変を伴う工事については埋蔵文化財の事前調査が必要と考えられた。

石田川上流域の改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、既に平成6年と平成9年に実施されており、埋蔵文化財発掘調査報告書『上江田西田遺跡・源六堰遺跡』（平成22年刊行）として調査の成果が記録されている。今回の改修工事対象地は、これよりさらに上流を約1.5km遡った地点で、新屋敷前遺跡として登録されている。新屋敷前遺

跡では、別の工事事業に伴う発掘調査歴があり、既に縄文時代と古墳時代の集落遺跡であることが判明している。

工事主体である群馬県太田土木事務所では、工事予定地における埋蔵文化財の有無と発掘調査の必要性を群馬県教育委員会に照会した。群馬県教育委員会では平成28・29年度に対象地での試掘調査を実施し、最終的に工事予定地の中央付近にあたる690㎡分について埋蔵文化財発掘調査が必要と回答した。試掘調査の結果では、溝1条、Hr-FA二次堆積層、縄文土器、土師器が確認され、集落遺跡ではないものの、その縁辺地での遺構や遺物の存在が予想された。

2. 埋蔵文化財発掘調査の委託契約

群馬県太田土木事務所では、石田川上流区での河川改修工事事業を進めるため、平成29年度に埋蔵文化財の事前発掘調査を実施したい旨を群馬県教育委員会に伝えた。これを受けた群馬県教育委員会では、新屋敷前遺跡の発掘調査事業を公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託するよう調整を進めた。調整の結果、発掘調査の実施は平成29年10月1日～10月31日の1か月間と計画され、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者による事前手続きが速やかに進められることとなった。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団では、群馬県太田土木事務所へ事業委託経費に関する見積書・発掘調査工程計画書を提出し、承諾を得たうえで発掘調査事業委託の契約を平成29年9月1日に締結することとなった。

締結された委託事業名称は、「平成29年度社会資本総合整備(防災・安全)(一)石田川(上流工区)河川改修事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査」であり、発掘事業主体を公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団とし、工事主体は群馬県太田土木事務所、事業調整を群馬県教育委員会が務めることとした。なお、事業地域である太田市には、周辺地域における埋蔵文化財情報を中心とした諸々の協力を求めることとした。なお、本遺跡の北側において、過去に縄文土器や古墳時代の土師器が発見されている。これについては第5章で紹介する。

第2章 調査の方法と調査経過

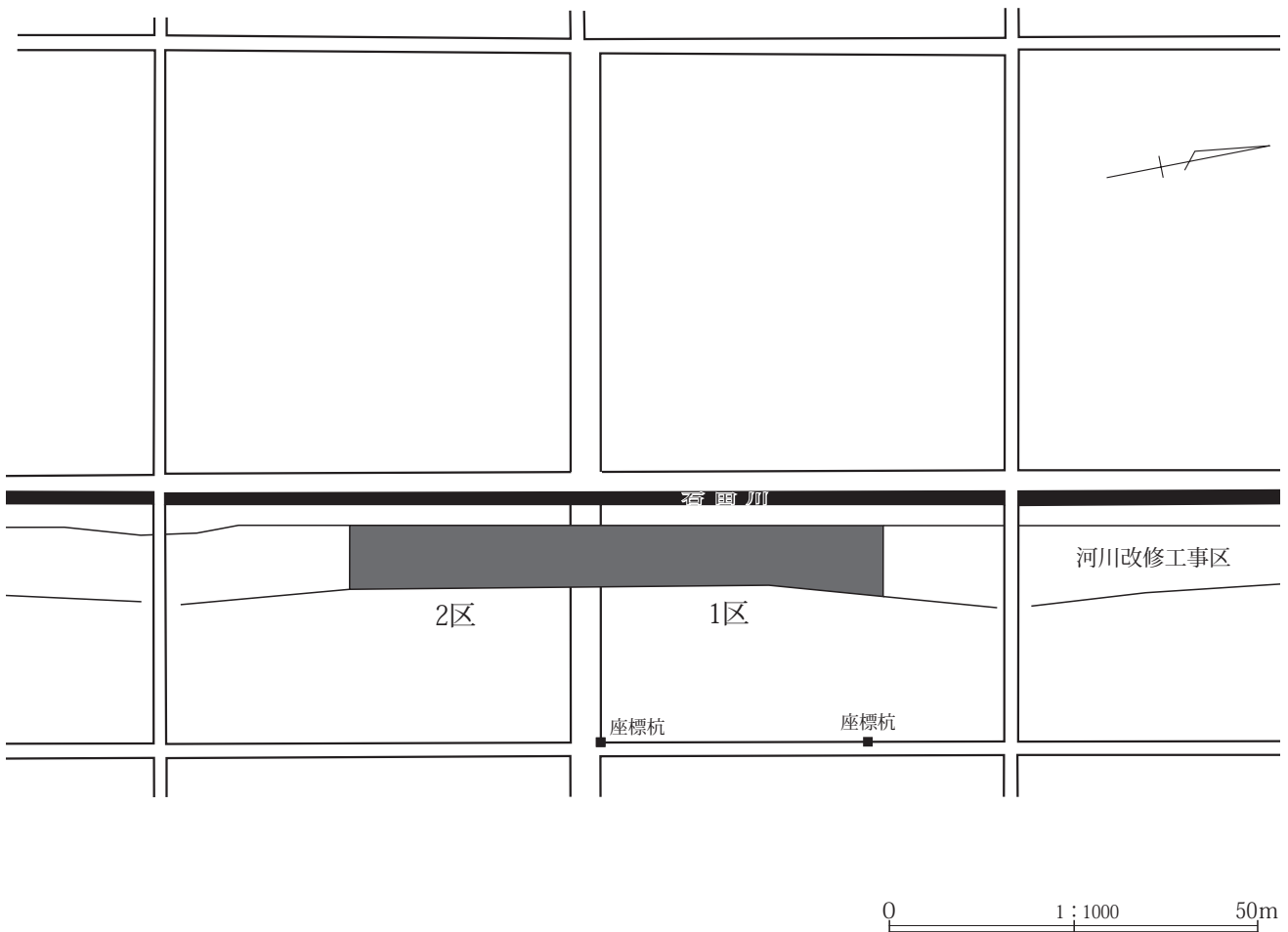
1. 調査の方法

新屋敷前遺跡の調査区は幅8～12m、長さ72mと南北方向に細長いものである。調査区の中央には石田川を渡る小規模な橋(「屋敷橋」)が架けられており、これに続く道路が横切っている。発掘調査はこの部分を除けて実施し、北側を1区、南側を2区と命名した。

堆積土層については、平成28年11月と平成29年6月に、群馬県教育委員会によって実施された試掘調査で把握されていた。調査区は北から南にかけての傾斜面をなし、砂利ないし現耕作土の堆積する表土面から40～70cmの深さで榛名山二ツ岳給源のテフラ(Hr-FAと思われる)の二次堆積層があり、2区では深さ80cmほどで地山に相当する灰白色シルト層に達する。また主に縄文土器・古

墳時代の土師器の破片が出土していた。調査面の設定については、鍵層となりうるテフラ層がブロック状の二次堆積でしかないことから、この面での調査はあきらめ、縄文時代遺構検出を想定して、地山面の灰白色シルト上面を遺構確認面とした。

測量については世界測地系座標を基準とし、100m方眼で大区画(1～4G)を設定する。さらに大区画を4m方眼で分割し、X軸方向をアルファベット大文字(A～Y)、Y軸方向をアラビア数字(1～24)で示した。ちなみに、1区は1G～3Gにまたがり、2区は3G内に位置する。これにより、遺構と遺物の位置を示すにあたっては、区名-X軸アルファベット-Y軸アラビア数字で表記する。



第1図 新屋敷前遺跡発掘調査範囲図

2. 調査経過

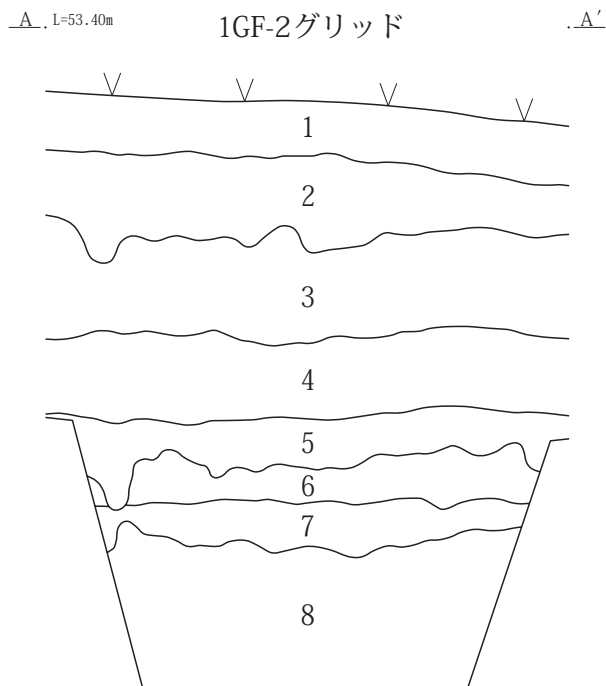
発掘調査は、北側の1区の表土削除から始まり、試掘調査結果に基づいて遺構確認面での精査を開始した。表土層の下位に堆積する黒褐色土層は縄文土器を含む包含層であることが確認できたため、手作業による削平作業に切り替え、この調査面を第1面とした。第1面では焼土箇所1基を検出した。黒褐色土層からは縄文土器・土師器等が少量散在し、遺構が確認できないことをもって包含層扱いとした。黒褐色土を除去し、最終的にローム上面を2番目の調査面としたため、測量図は第1面と第2面で記録してある。第2面の調査では、1区で溝2条、2区では溝2条とピット4基を検出したほか、黒褐色土層から溝堆積土層にかけて古墳時代土師器の集中出土箇所を確認した。この部分での出土遺物については、ほぼ全点座標値を記録したうえで取り上げた。最終段階では、形状の確認できた遺構の記録、遺物取上げを終えて調査を終了した。

なお、調査記録と出土遺物は、平成29年12月1日より平成30年1月31日までの2か月間で整理業務を行い、報告書作成に当たった。

3. 基本層序

新屋敷前遺跡の基本層序を確認するために、2か所の土層断面調査を実施した。場所は1区のD-2グリッド(基本土層1)、F-グリッド(基本土層2)である。このうち、基本土層1は試掘トレンチ断面をそのまま記録したもので、遺構調査面までの堆積土層がない。従って、本遺跡の基本層序としては表土から確認できる基本土層2を図示することとする。

第2図の基本層序図で示した通り、表土からロームまで8層に分けた。1・2層は近現代の畠耕作土に相当し、天明三(1783)年の浅間山噴火降下軽石であるAs-Aがまばらに見られるので、降下堆積後の耕作攪拌によるものと考えてよい。3・4層は緻密な黒褐色土で、下位の4層は粘性を帯びる。3層からは古墳時代土器片が多く出土しており、遺構の掘り込まれた土層である可能性がうかがわれた。なお、3層の上位には白色の軽石細粒が散在するが、同定はできなかった。基本層序確認箇所では見られなかったが、検出された溝の堆積土最上位附近に、6世紀初頭の榛名山噴火テフラHr-FAがブロック状の堆積を示している。これが基本層序の3層に相当す



- 1 褐色土(10YR4/4)現耕作土。As-Aが少量混入する。締まりがない。
- 2 褐色土(10YR4/4) As-Aが少量混入する。堆積は1層に比べて緻密である。
- 3 黒褐色土(10YR2/2)白色の軽石がごく少量混入する。堆積は緻密である。縄文土器、古墳時代の土師器を含む包含層。
- 4 黒褐色土(10YR2/2) 2～5 cm径の小礫をごく少量含む。堆積は緻密で、3層に比較して粘性がある。
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 4層の土とローム土が混入する土層。堆積は緻密である。上面に鉄分の凝集がみられる。
- 6 黄褐色土(10YR5/6)関東ローム層のうちAs-YP層。
- 7 灰白色土(10YR8/2)きわめて粘性の強く、地下水の影響で白色を呈する土。
- 8 褐灰色土(10YR6/1)ハードロームブロックが少量混入する、均一なローム土。

第2図 基本層序

第2章 調査の方法と調査経過

ることから、3層は6世紀初頭以前の堆積土層と捉えられよう。4層は粘性を帯びて酸化鉄の凝集斑紋が見られる。後述するように、古墳時代と考えられる溝が切り込んだ地山であり、それ以前の堆積土層と捉えられる。ちなみに3層・4層とも、3世紀末頃と思われる浅間山噴火軽石As-Cの堆積は見られない。基本層序記録地点は最北端の調査区内で最も高い場所に位置しており、ここより標高差で0.4m低い調査区南端では、3・4層に相当する土層に酸化鉄凝集とともに未分解植物もみられるので、地下水位の影響が大きいと推測された。5層はローム層からの漸移層で、酸化鉄凝集が著しい。凝集斑紋は上下層を貫いて横位に見られるため、地下水位の上下動が反映されたものと考えられよう。

6層～8層は上部ローム層に相当する。6層には浅間板鼻黄色軽石As-YPが見られる。7・8層は粘性が強く、色調は白～淡い緑色がかっている。高水位によるグライ化と考えられよう。

4. 調査日誌抄

発掘調査は、試掘データに基づいて積算された1か月の調査期間で実施された。また調査担当者が一名で対応

することと、廃土置き場の都合から、全面を一度に調査するのではなく、南北に分割した1区と2区で順に調査を進めることとした。北側の1区では、2条の溝と焼土痕、および縄文土器ほか少量の遺物が出土したのみで、必要な記録を作成して順調に進めることができた。南側の2区の表土掘削に着手する直前、停滞気味の前線の影響で10月13日(金)から雨天となり10月16日(月)まで降雨が続いたため、石田川の増水に留意する事態となった。幸い降雨量が少なくなり、ポンプ稼働によって調査区内の排水が順調に行われたため、翌10月17日(火)から2区の調査を開始することが可能となった。2区の調査では、溝3条とピット数基が確認されたが、古墳時代中期の土器出土集中箇所が検出されたため、その記録作成と取上げ作業に調査手間の多くを費やすこととなった。10月22日(日)から翌23日(月)にかけては、台風21号の縦断により、強風と豪雨にみまわれて一時的に調査の中断をせざるを得なかった。調査期間で残された一週間のほとんどを出土遺物取上げ作業に費やし、また最終的に遺構との関連性を確認して記録作業を終了した。最終段階の10月30日・31日には調査区の原状復帰となる埋め戻し作業を完了し、すべての発掘調査作業を終了した。

第1表 新屋敷前遺跡調査及び整理工程

期間(10/1～10/31)	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
事前準備	■				
安全対策	■		■	■	
表土掘削	■		■	■	
遺構確認・掘削	■	■	■	■	
遺構精査		■	■	■	
遺構記録		■	■	■	
出土遺物取上げ・記録	■	■	■	■	
撤廃作業					■
調査区復旧					■

期間(12/1～1/31)	12月	1月	備考
記録類基本整理	■		
写真・図面編集	■		
遺物分類・接合・復元	■		
遺物実測	■	■	
原稿執筆		■	
報告書編集		■	3月刊行
管理台帳作成			■

第3章 遺跡周辺の地形と歴史的環境

1. 遺跡周辺の地形環境

群馬県のほぼ中央に位置する赤城山は、富士山に次ぐといわれる広大な裾野を広げた成層火山である。赤城山南面に広がる山麓地形の東部で、栃木県境を流れる渡良瀬川との間には大間々扇状地が展開している。大間々扇状地の形成は渡良瀬川の東遷によるもので、大間々町(現みどり市)を扇頂として南北約18km、東西約13kmの規模を誇る。大間々扇状地の形成は古新の2期に分けられ、西側は古期形成の「桐原面」、中央～東側が新規形成の「藪塚面」と呼ばれる。

本遺跡の立地する場所は、大間々扇状地の藪塚面南西端に位置しており、これより以南は傾斜が緩く、洪積台地や利根川左岸の自然堤防などの微高地と、これに挟まれた低地が展開している(第3図)。大間々扇状地藪塚面は、南側に開く典型的な扇状地形を呈しており、形成が新しい(約3万年前から)ために、ほぼ全域が乏水地形で貫流する自然河川も見られない。本遺跡の位置する地点での標高は55m前後で、このあたりをほぼ真ん中にする標高60～50mの範囲が見かけ上の扇端部となり、扇状地下を流れる地下水が湧出する地帯となっている。地名に残る「東新井」「金井」「市野井」「小金井」は、これらの湧出地にちなんだものと考えられる。本遺跡の西側を流下する石田川の源は、約800m北にある「矢太神湧水」である。湧水点は沼の北側で、現在でも自噴する様子を観察することができる。石田川は湧水点から3kmほどは、直線的ないし小さく蛇行しながら南流する。この付近はほぼ平坦だが、表土下には扇状地礫層が確認されるので、大間々扇状地藪塚面の南端が延びていたことが判る。南東方向に向きを変えた石田川は、さらに利根川左岸に形成された自然堤防に沿って東方に流れを変え、再び南東方向に流下して利根川本流に合する。矢太神湧水の西1.2kmにも湧水があり、ここから南流する河川は約3kmで石田川と合流する。反対の東側1.2kmには重殿湧水があり、これを源流とする小河川が南流する。石田川の東側には、大間々扇状地以前と考えられる南東方向に延びた木崎台地が形成されている。木崎台地の基盤は赤城山からの泥流堆積物と考えられており、その上には

中部ローム上位以上が堆積する(文献41)。標高は55～35mで南方に緩く傾斜した微高地である。

大間々扇状地桐原面は、藪塚面以前に形成された古期扇状地で、扇状面には南北方向に延びる細長い侵食谷が数条刻まれている。この谷の最奥部には湧水点が見られることから、扇端部にあった湧出点が、次第に侵食しつつ上流方向に移動したものと考えられる。谷の幅は全体に細く100～300mほどである。本遺跡地点から西方約2.5kmには、赤城山南麓を源とする早川が扇状地形を貫流しており、大間々扇状地のなかでは約300mと比較的幅の広い開析谷を形成している。

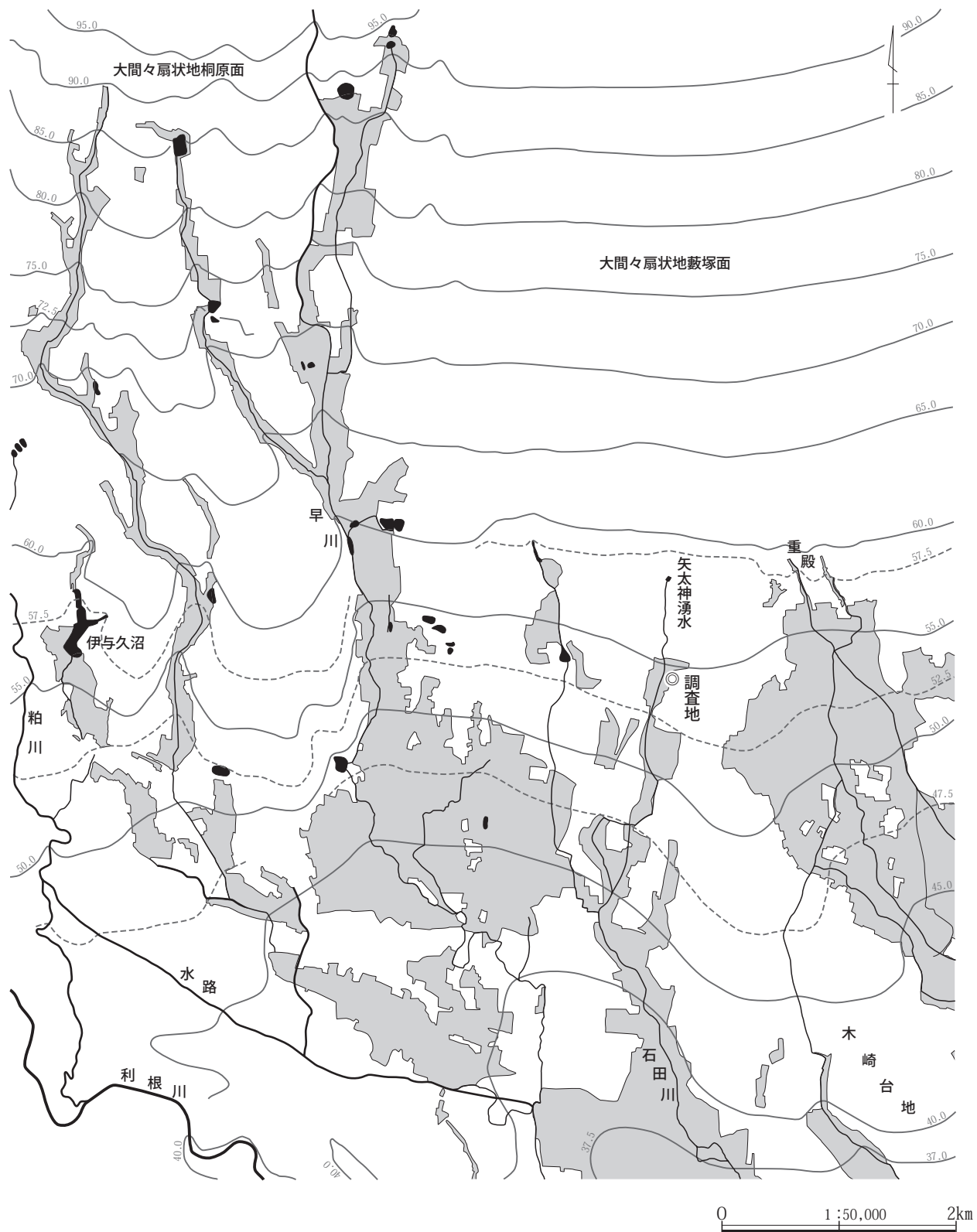
大間々扇状地の南側には、木崎台地や利根川左岸の自然堤防地形の間に沖積低地が形成されている。ここでは沖積層の下位に扇状地礫層が確認されることから、「扇端低地」とも呼称される(文献41)。この扇端低地には水田土壌が分布するが、新屋敷前遺跡周辺では湿潤な環境を示す黒泥土層が主体となっている。

本遺跡の立地を微視的にみると、西側に石田川と谷状低地が南北方向に延び、東と北側に扇状地末端の微高地が広がる。この地点での石田川の開析谷は幅が10～20mほどと狭く、浅い窪地状となっている。遺跡地点の北側に展開する高燥な扇状地では、冬の終わりから「赤城おろし」が猛烈な風力で吹きすさぶ。この風で舞い上げられた土粒は南方の低湿地に堆積を繰り返すことになる。現在でこそ、扇端低地は水田として利用されているが、灌漑用水を扇端部湧水に頼るだけでは不十分であつたらしく、そのことが後の中～近世における人工灌漑水路の開削につながったものと考えられよう。

2. 周辺遺跡の分布

ここでは、新屋敷前遺跡で判明した縄文時代及び古墳時代の遺構と出土遺物について、それと関連性の考えられる周辺遺跡を中心として取り上げることとしたい。

旧石器時代 木崎台地縁辺部と大間々扇状地扇端の湧水地近辺で数箇所の遺跡が見られ、いずれも始良Tn火山灰(AT)の上か上部ローム層中のものである。木崎台地西縁の中江田A地点遺跡ではAT火山灰の上10cmの位置から、黒色安山岩製の刃器状剥片が出土しており、当該地



- ・明治18年測量同20年製版同21年4月15日出版の迅速測図「境町」二万分の一をもとに作成。
- ・黒つぶし箇所は、沼・池・河川・水路を示す。
- ・グレー部分は沖積低地を示す。
- ・地形区分は測量当時の土地利用区分に基づいたものである。

第3図 周辺地形と遺跡の位置

域では古い例として知られる。

縄文時代 大間々扇状地扇端から南方の微高地にかけては、縄文早期から後期までの長期間にわたってヒトの活動領域であったことが推測される。本遺跡の立地する石田川流域には、水源である矢太神湧水地周辺から下流域の両岸微高地まで多くの縄文時代遺跡が分布する。矢太神遺跡(7)と矢太神沼遺跡(8)は湧水地を中心として形成された縄文時代集落遺跡と考えられ、前者は昭和30年代、後者は昭和50年の発掘調査によって、後期初頭の竪穴住居のほか早期の撚糸文土器が確認されている。矢太神湧水地から南へ約250mには妙参寺沼があり、これを囲むように立地する新屋敷北遺跡(5)と妙参寺沼遺跡(6)では早期から後期までの土器が満遍なくみられる。なお、草創期の爪型文土器を出土した遺跡として、石田川中流域左岸の木崎台地西縁辺に位置する中江田A・B地点遺跡が知られる。

本遺跡調査区の北東約120m地点では、昭和45年に同じ新屋敷前遺跡の一角を発掘調査しており、わずか2×2m範囲の調査であったが、縄文時代後期の竪穴住居1棟を検出している。ここからは、革袋を模したと思われる舟形注口土器と堀之内2式を主体とする土器が出土している(文献1)。一方、ここより南方約1kmにある上江田西田遺跡(26)では、石田川河川改修に伴う発掘調査で後期の堀之内2式期と思われる敷石住居跡が確認されている(文献37)。石田川は土地改良等に伴う人工的改変を受けて現流路に至っているが、上江田西田遺跡で覆土に多量の縄文遺物を含む埋没河道の存在から、縄文時代以降に度々流路を変えていたと思われる。このため、現在は低平に見える低地内にも埋没して隠れた微高地が樹枝状に存在していたことが類推され、そのような場所も縄文時代の生活領域に組み込まれていたと思われる。

弥生時代 石田川左岸の微高地上で数カ所の遺跡が知られるが、出土遺物量から極めて小さな遺跡規模であること、分布も非常に稀薄であることが類推される。本遺跡の近辺では後期の樽式期の土坑が検出された東田遺跡(11)が知られる程度である。

古墳時代 弥生時代の稀薄な状態から一転して、扇端低地を中心に前期・中期・後期の遺跡の広範かつ継続的な分布が知られ、安定的な集落域となった感がある。本遺跡の北に隣接する新屋敷北遺跡(5)、南方では石田川

両岸に位置する江田館跡(13)・上江田西田(26)・源六堰(27)・下田中八幡(25)・下田中(いずみ団地)(17)の各遺跡で前期の遺構・遺物が確認されている。なお、本遺跡においても畠耕作で2点の壺が発見されている(文献1)。なお、矢太神湧水地より東方750mほどにある重殿遺跡(9)では住居跡50棟を超える前期集落、さらに3.5km離れた中溝・深町遺跡では大型掘立柱建物や石組み井戸を伴う前期の居館跡が知られている。扇端低地では、前期に続いて中期・後期と集落址の分布が広範に展開するが、一方古墳については後期にほぼ限られるようで、本遺跡の南方約1kmの石田川沿岸には鈴鏡ほか玉類・大刀などの副葬品を出土した前方後円墳である兵庫塚古墳と円墳群で構成される綿内地区の古墳群が知られる。

奈良・平安時代 本遺跡の附近は、律令期の国郡郷制における「和名抄」に記された「新田郡淡甘郷」に推定されている(文献42)。新田郡の中心地は、東北東約4.3kmにある7世紀後半から9世紀にかけての新田郡衙郡跡に比定された天良七堂遺跡である。その東方には郡寺と考えられる寺井廃寺跡、西方には基壇建物を配した入谷遺跡、南側に接して推定東山道駅路(下新田ルート)(30)と考えられる幅12mの道路跡、さらに400mほど南側でこれに並行して東西に走る推定東山道駅路(牛堀・矢ノ原ルート)(29)も検出されている。なお、本遺跡より南方約1.8kmには採集資料ながら8世紀半ばの上野国分寺創建瓦と同様の瓦片が出土しており、小規模な寺(源六堰廃寺)の存在が推測される。本遺跡周辺における集落遺跡としては、南西方の下田中遺跡(いずみ団地遺跡)(17)があり、平安時代に属する7棟の掘立柱建物が検出されている。

中世 新田郡域は、中世武士団の新田氏一族により、新田荘が立荘・経営された地である。立荘の立役者となった源(新田)義重の置文で「空閑の郷々」としたなかに、「えだかみしも」「たなか」とあるので、本遺跡周辺地域の上下江田・下江田・上田中・下田中であることが判る。新田荘の詳細は「正本文書」「長楽寺文書」に記されており、これに関連する寺社・館・湧水地のうち、重要な11箇所については「史跡新田荘遺跡」として国指定を受けている。そのうちのひとつである江田館跡(13)は、本遺跡の南方1kmにあり、土塁と堀を廻らせた本丸に環濠屋敷を配した戦国期の平城である。元々は中世館を祖とすると考えられているが、居室については不明な点が多い。



第4図 周辺遺跡分布図

第2表 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地 新田町字名	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡種類	主な出土遺物	特記事項	主要参考文献
1	新屋敷前	大根	●	▲	●					集落	ランプ形注口土器		1,35 本書
2	観音前	大根	●		●					集落	土師器		14,18,35
3	大通領	上江田			●			●	●				18
4	一丁田	大根 上江田	●		●					集落			1,9,18
5	新屋敷北	大根	●		●					集落	土師器		1,32,35
6	妙参寺沼	大根	●							集落	縄文土器		1,25
7	矢太神	大根	●	●	●	●	●			集落			1,9,18
8	矢太神沼	大根	●							集落	縄文土器、石棒	矢太神湧水は国指定史跡	1,7,9,18
9	重殿	市野井	●	●	●	●	●	●	●	集落	銅鏡、土師器、板碑	重殿湧水は国指定史跡	1,5,18,34
10	北宿	上江田	●		●					集落	縄文土器、石器、土師器、須恵器等	範囲広く江田館を含む	14
11	東田	上江田	●	●	●			●		集落	土師器、須恵器、陶器、砥石、鉄滓、木製品		1,10,23,28
12	庚申塚	上江田			●					集落、館	土師器		1,18,30
13	江田館跡	上江田	●		●			●		集落、館		国指定史跡	1
14	後谷	上江田					●	●		生産址、溝			21
15	西田	上江田			●	●				集落	墨書土器		8,21
16	前六供	上田中			●	●	●	●	●	集落、古墳、粘土採掘坑	土師器、須恵器、板碑、カワラケ、陶磁器、勾玉形模造品、木筒、木皿、鋤等	全長40m大の前方後方墳。木枠の残った井戸から貞観9年の紀年銘のある木筒が出土	1,21,31,39
17	下田中 (いずみ団地)	下田中			●		●			集落			1,4
18	五領	上田中	●		●						縄文土器、土師器		1,18
19	本村北	大根	●		●						土師器、埴輪		18
20	西本村	大根	●		●			●	●				28
21	藤塚	市野井			●	●	●	●	●				18,33,35
22	松ノ木	市野井			●	●	●			集落、円形周溝	土師器、須恵器、墨書土器、木柱		19
23	振矢	反町			●	●	●	●	●	集落	土師器、須恵器		19,23
24	東油田	赤堀			●					集落	土師器		1,18,35
25	下田中八幡	下田中	●		●			●	●	集落、道路			28
26	上江田西田	上江田	●		●		●	●		集落	注口土器、土師器		28,30,37
27	源六堰	下田中	●		●		●	●		集落	土師器、須恵器		1,18,23,37
28	谷津	上江田	●		●	●	●			集落、火葬址			8,18
29	牛掘・矢ノ原ルート	市野井				●	●			道路		推定東山道駅路	25,33,35,38
30	下新田ルート	市野井				●	●			道路		推定東山道駅路	13,33,35,38
31	境ヶ谷戸	市野井 村田			●	●	●	●		集落	土師器、須恵器、巡方、炭化米、円面硯、墨書土器、唐三彩陶枕	館か居館と推定される遺構を検出	15,18,20,23,25 26
32	赤城南	市野井			●	●	●			集落	土師器、須恵器		1,6,18,34,35,40
33	揚原	市野井			●	●	●	●		集落	土師器、円面硯		18,27,34
34	市野井・本郷	市野井			●			●	●	集落	土師器、陶磁器		18,29,34
35	通木	市野井			●	●	●	●	●	集落	土師器、須恵器		18,23,24
36	杉ノ前	市野井			●	●	●	●	●	集落	埴輪、土師器、木製品	形象埴輪が4点出土	24
37	梅ノ木	市野井	●		●	●	●			集落、河道	土師器、須恵器、曲物、木製農具		19
38	中屋敷・中村田	市野井 村田			●	●	●	●		集落、墓	土師器、須恵器、木製品、緑釉皿	方形周溝墓	17,23
39	反町館跡	反町			●			●	●	集落、館	土師器、須恵器、鉄製品、カワラケ	国指定史跡	20,34,35,36
40	要害	反町			●			●	●	堀	土師器、陶磁器		18,23,30

第3章 遺跡周辺の地形と歴史的環境

No.	遺跡名	所在地 新田町字名	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡種類	主な出土遺物	特記事項	主要参考文献
41	油田古墳群	赤堀			●					古墳			
42	一町田・堀之内	木崎			●		●	●	●	集落			1,23,30
43	大通寺後	木崎			●					集落	土師器、須恵器	古墳後期住居	1,18,25
44	台	高尾	●	●	●	●	●	●		集落、粘土採掘坑	土器、石器		1,12
45	中道	下田中			●		●	●	●	集落、河川跡	土師器、須恵器、木製品		1,8
46	下田中川久保	伊勢崎市境 三ツ木町・ 下田中			●	●	●		●	集落、水田、祭祀関連、道路	土師器、須恵器、馬骨		16,35
47	三ツ木	伊勢崎市境 三ツ木町	●	●	●	●	●	●	●	集落、墓		方形周溝墓	2
48	西今井	伊勢崎市境 西今井町			●		●		●	集落			11
49	新割	上中					●					火葬墓	18

参考文献

- 1 新田町誌刊行委員会・新田町1987「新田町誌第二巻資料編(上)」
- 2 群馬県教育委員会1976「三ツ木遺跡・西今井遺跡・小角田前遺跡」
- 3 新田町編さん室1981「木崎中学校校庭遺跡」
- 4 群馬県企業局1983「萱野・下田中・矢場遺跡」
- 5 新田町教育委員会1984「重殿遺跡」
- 6 新田町教育委員会1984「市野井赤城南遺跡」
- 7 東京電力株式会社1985「凶録矢太神沼遺跡」
- 8 東京電力株式会社1988「西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡」
- 9 新田町1987「新田町誌第二巻資料編(上)」
- 10 群馬県新田町教育委員会1987「東田遺跡」
- 11 群馬県教育委員会1987「西今井遺跡」
- 12 群馬県新田町教育委員会1988「台遺跡」
- 13 新田町教育委員会1992「下新田遺跡」
- 14 群馬県新田町教育委員会1993「北宿・観音前遺跡」
- 15 群馬県新田町教育委員会1994「境ヶ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡」
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団1995「下田中中道遺跡・下田中川久保遺跡」
- 17 新田町教育委員会1997「中屋敷・中村田遺跡」
- 18 新田町教育委員会1998「新田町の遺跡」
- 19 群馬県新田町教育委員会1999「松ノ木・梅ノ木・振矢遺跡」
- 20 群馬県新田町教育委員会1999「新田町内遺跡Ⅰ」
- 21 群馬県新田町教育委員会2000「前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡」
- 22 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000「三ツ木皿沼遺跡」
- 23 群馬県新田町教育委員会2000「新田町内遺跡Ⅱ」
- 24 群馬県新田町教育委員会2000「通木遺跡・杉ノ前遺跡」
- 25 群馬県新田町教育委員会2001「新田町内遺跡Ⅲ」
- 26 群馬県新田町教育委員会2001「境ヶ谷戸遺跡Ⅱ」
- 27 群馬県新田町教育委員会2001「上野井古墳群・揚原遺跡・中江田A遺跡」
- 28 群馬県新田町教育委員会2002「新田町内遺跡Ⅳ」
- 29 群馬県新田町教育委員会2002「市野井・本郷遺跡」
- 30 群馬県新田町教育委員会2003「新田町内遺跡Ⅴ」
- 31 群馬県新田町教育委員会2003「前六供遺跡Ⅱ」
- 32 群馬県新田町教育委員会2003「新屋敷北遺跡」
- 33 群馬県新田町教育委員会2004「藤塚遺跡・下新田ルート・推定東山道駅路」
- 34 群馬県新田町教育委員会2004「新田町内遺跡Ⅵ」
- 35 群馬県新田町教育委員会2005「新田町内遺跡Ⅶ」
- 36 群馬県新田町教育委員会2005「反町館跡」
- 37 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2010「上江田西田遺跡・源六堰遺跡」
- 38 太田市教育委員会2011「新田郡衙と東山道駅路」
- 39 群馬県埋蔵文化財調査事業団2013「前六供遺跡」
- 40 太田市教育委員会2017「太田市内遺跡12」
- 41 沢口 宏1990「第一編 自然」新田町誌第一巻通史編
- 42 須田 茂1990「第六章奈良・平安時代の新田郡と人々の暮らし」新田町誌第一巻通史編

第4章 検出された遺構と遺物

概要

調査を南北に分割して、北側を1区、南側を2区とした。これは調査上の便宜であるため、遺構名称については通番で付した。

検出された遺構は、溝4条、焼土1か所、ピット4基である。溝と焼土は古墳時代のもものと推測されるが、ピットについては時期不明である。他に2区の黒泥土層から土器の集中出土箇所が確認された。

1. 溝

1号溝(第6図、PL. 3)

3GのW・X-4グリッド、1区南西隅で確認された。南北走向で、長さ3m、幅0.5mの東辺のみが検出できた。深さは土層断面から50cm前後を測る。底面は小さな凹凸を除けばほぼ平坦で、検出部分での底面レベルにほとんど差はない。堆積土は黒褐色土が主体で、底面から35cmの高さでHr-FA(降下火山灰のS9と推定される)がほぼ水平に堆積する。出土遺物は見られない。中央底面に30×20cm、底面からの深さ24cmの楕円形ピット1基が検出されたが、伴う施設か、重複する異時期のものかは確定できなかった。堆積土の特徴から、1号溝の埋没時期は5世紀代で、開削時期はそれ以前である以外は不明である。

2号溝(第7図、PL. 3)

3GのX-3からY-2グリッドにかけて、1区東端に沿って検出された。南北走向でN-18°-Eを指す。確認面での最大幅は45cm、検出長は8.1mである。深さは土層断面から80cm前後と推測される。底面レベルはほぼ同じで、標高52.62m前後である。堆積土は粘性の強い黒褐色土(黒泥土)が主体で、埋没した最上層にはHr-FAに近似したテフラ粒が見られる。なお、黒褐色土層中には未分解の植物茎根が残る。出土遺物は後期縄文土器1点のみ。埋土の特徴から1号溝と前後する古墳時代(5世紀代か)のもものと推測されるが、1号溝ほどHr-FAの堆積が明瞭ではないので、確定できない。

3号溝・5号溝(第8・9図、PL. 4・6・7)

3号溝は、3GのO-4からS-4グリッドにかけて、2区中央部で南北走向に蛇行する溝として確認した。表土

から60cmほど下に堆積する黒褐色土層上面を第1調査面として、これを掘り込む溝として確認できた。この段階では埋土認定が困難なため、下層地山であるローム上面の調査第2面から改めて全体の掘削調査を行った。これが5号溝にあたる。

5号溝は調査2区を縦断する南北走向に蛇行する溝として検出された。3号溝と合成して計測すれば、検出長は23m、1区最北端の断面から上端幅は60cm前後、深さ35cmを計測した。走向は緩く蛇行するが、N-4°-Wで15mほど直線に走ることから人工掘削による溝で間違いない。底面レベル標高は北端が52.96m、南端が52.76mで、約20cmの比高となる。等高線や底面標高からみて、南側へ傾斜する溝として理解できる。堆積土層は黒褐色土を主体とし、上層にはHr-FAに類似したテフラがブロック状に見られる。出土遺物は古墳時代中期(5世紀代)の土器片を主体に80数点が出土しており、土器出土集中箇所の土器群と接合関係が見られる(22・25・47・65)ことから、5号溝に伴出するものとは言い切れない。

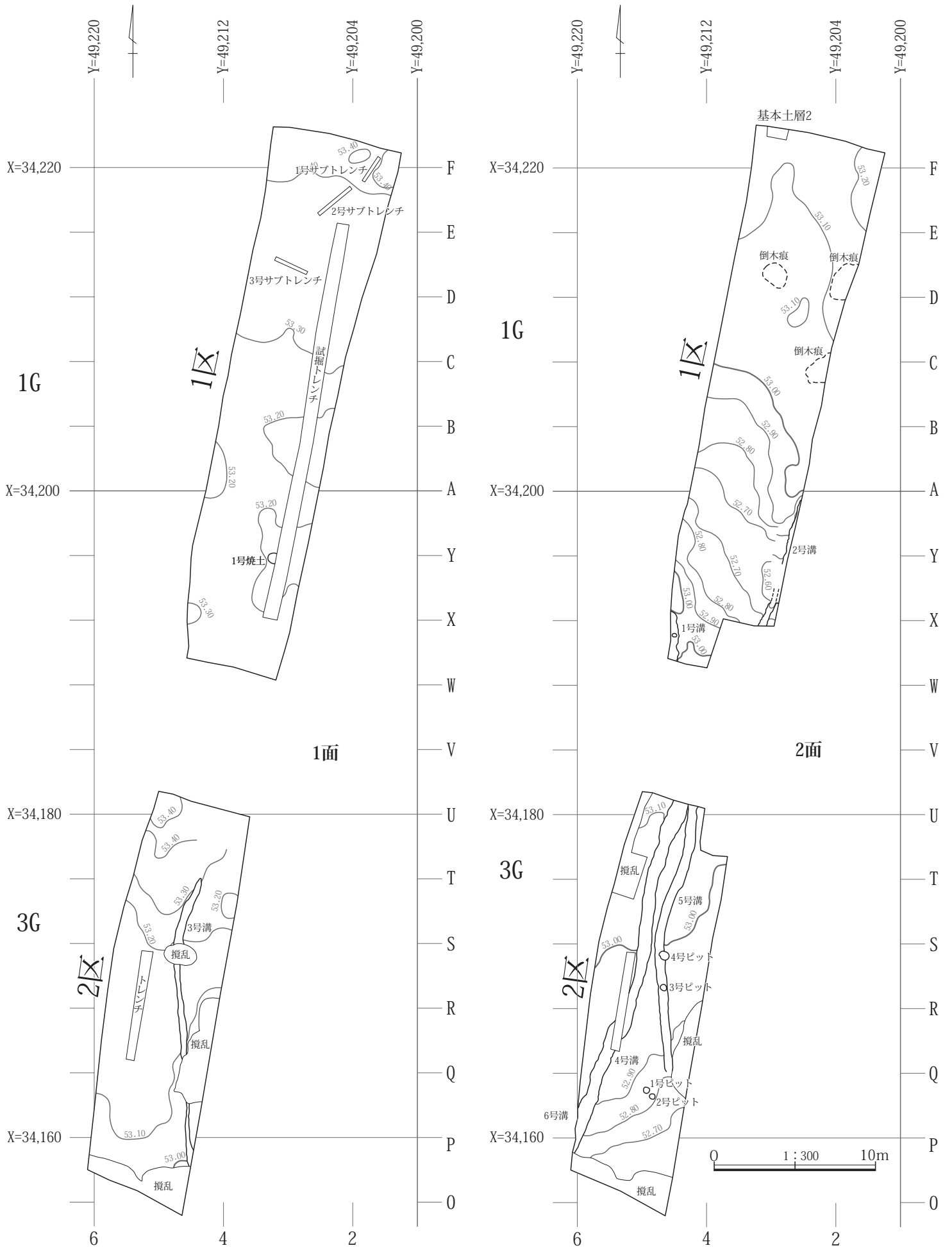
5号溝は4号溝と2区北端で重複し、断面観察では4号溝が切っているように推測される。

5号溝の埋没時期は、中世のAs-B混在土層より古く、さらに4号溝より古いということになる。このことから5世紀代以前の埋没と考えておく。

4号溝・6号溝(第9・10図、PL. 5~7)

3GのO-5からU-4グリッドにかけて、2区中央を縦断する南北走向の溝として検出された。確認したのは、黒褐色土を除去した第2面である。4号溝は調査2区の北端から南西端まで途切れることなく検出されたが、6号溝はP-5グリッドで4号溝から南西方向に分岐する走向で検出された。

4号溝の検出長は23m、最大幅は北端で1.2m、平均幅は0.7mを測る。深さは、最北端の土層断面で48cmを測り、底面レベル標高は最北端が52.85m、南西端で52.51mである。底面勾配は約1.5%に満たない。わずかな勾配ながら、次第に段状に下がる(第10図)ことから、南方に向かって水流のあったことが推測される。ただし、流水を示す砂質土の堆積は見られない。溝を埋める堆積土は黒褐色土が主体で、下層にはローム塊も混じる。最

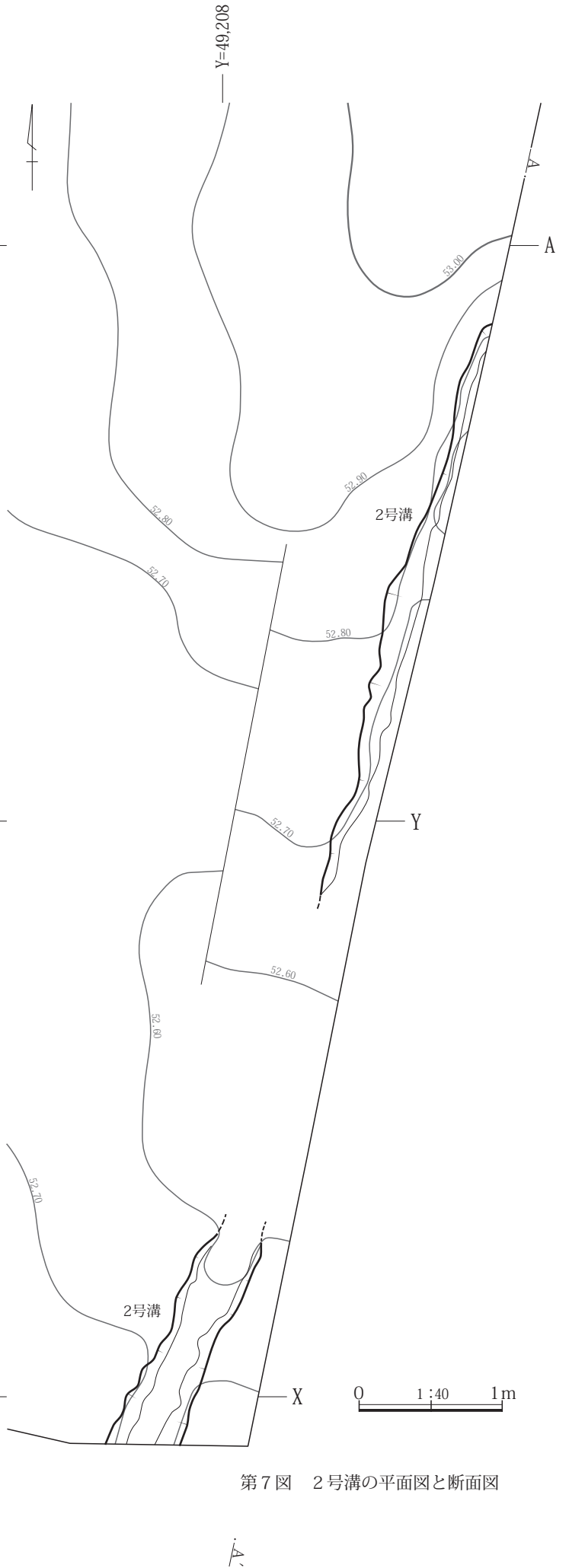


第5図 調査区と遺構分布図



- 1 褐色土(10YR4/4)現耕作土。As-Aが少量混入し底部に関東ローム土ブロック(As-YPを含む層)が混入する。脆弱である。
- 2 褐色土(10YR4/4) As-Aが少量混入する。1層に比べて緻密である。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) As-B(発泡していない火山砂)が上層にごくわずかに堆積する箇所がある。As-YPをごく少量含む。緻密である。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 5cm径の小礫を少量含む。炭化物(1~5mm径)を少量1パバーセント含む。緻密である。
- 5 黒褐色土(10YR2/2) Hr-FA (S 9相当)が土層の中央に堆積する。緻密である。
- 6 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。緻密である。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロックを少量含む。6層よりも脆い。
- 8 黒褐色土(10YR2/3) 2~5cm径の小礫をごく少量含む。緻密で、上層に比較して粘性が強い。
- 9 褐灰色土(10YR4/1) 4層の土とローム土が混入する土層。緻密である。上面に鉄分の凝集がみられる。
- 10 黄褐色土(10YR5/6)関東ローム層のうちAs-YP層。
- 11 灰白色土(10YR8/2)極めて粘性が強く、地下水の影響で白色を呈するローム土。
- 12 褐灰色土(10YR6/1)ハードロームブロックが少量混入する、均一なローム土。
- 13 褐色土(10YR4/4) 5~10cm径の小礫が少量に混入する護岸の地業土。
- 14 黒褐色土(10YR2/2) 5~10cm径の小礫が少量混入する護岸の地業土。

第6図 1号溝の平面図と断面図



第7図 2号溝の平面図と断面図

- 1 褐色土(10YR4/4)現耕作土 As-Aが少量混入する。極めて脆弱である。
- 2 褐色土(10YR4/4) As-Aが少量混入する。1層に比べて緻密である。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) Hs-B (発泡していいない火山砂)が上層にごくわずかに堆積する箇所がある。As-YPをごく少量含む。緻密である。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)基本土層注のAs-YPを少量含む。緻密である。2号溝覆土。
- 5 黒褐色土(10YR3/2) Hs-FAが水浚で洗われたように混入する。上層に比べて脆い。鉄分の凝集がみられる。2号溝覆土。
- 6 黒褐色土(10YR2/2) 5 cm径の小礫を含み、粘性のある黒褐色土が混入する。緻密である。2号溝覆土。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)川砂状の砂礫がブロック状に混入する。緻密で上層に比べて粘性がある。2号溝覆土。
- 8 黒褐色土(10YR2/2) 5層のHs-FAと似た火山灰状の土が10から15cmのブロック状に混入する。下層に10層の下にある白色のローム(火山性粘性土)が混入する。緻密で上層に比べて粘性がある。2号溝覆土。
- 9 黒褐色土(10YR2/2) 2～5 cm径の小礫をごく少量含む。緻密で、3層に比較して粘性がある。
- 10 基本土層の4層の土と白色ローム土(火山性粘性土)が混入する土層。緻密で、東側の同じ層に比べて粘性がある。

1. 溝

上層にはAs-B粒子も確認できるが、時期認定の決め手となるほどのプライマリーな堆積は見られない。出土遺物は、縄文土器片12点、古墳時代の土師器121点が出土しており、古墳前期のS字甕(第19図20)と小型甕(第19図21)をはじめ、4世紀後半～5世紀代の土師器片が主体となる。土器の出土層位として中位の第6層(第10図)に多く含まれており、出土標高の近似性から、後述する土器集中出土箇所の層位と関連付けて理解すべきであろう。4号溝の埋没時期は出土土器の時期認定から、5世紀中葉ころと考えておく。なお、R-4グリッドで3号・4号ピットと重複するが、新旧関係は明確でない。

6号溝は2mほど検出されたのみで、土層断面(第10図)から4号溝に切られていることが明らかである。ただし、交差するのではなく分岐形状で検出されていることから、本来4号溝の旧路であった可能性が高い。底面標高は52.64mで、4号溝底面より3cmほど高い。堆積土は黒褐色土主体で4号溝よりも明るく緻密である。出土遺物はない。4号溝との重複関係から5世紀前半までには6号溝は埋没していたと考えておく。

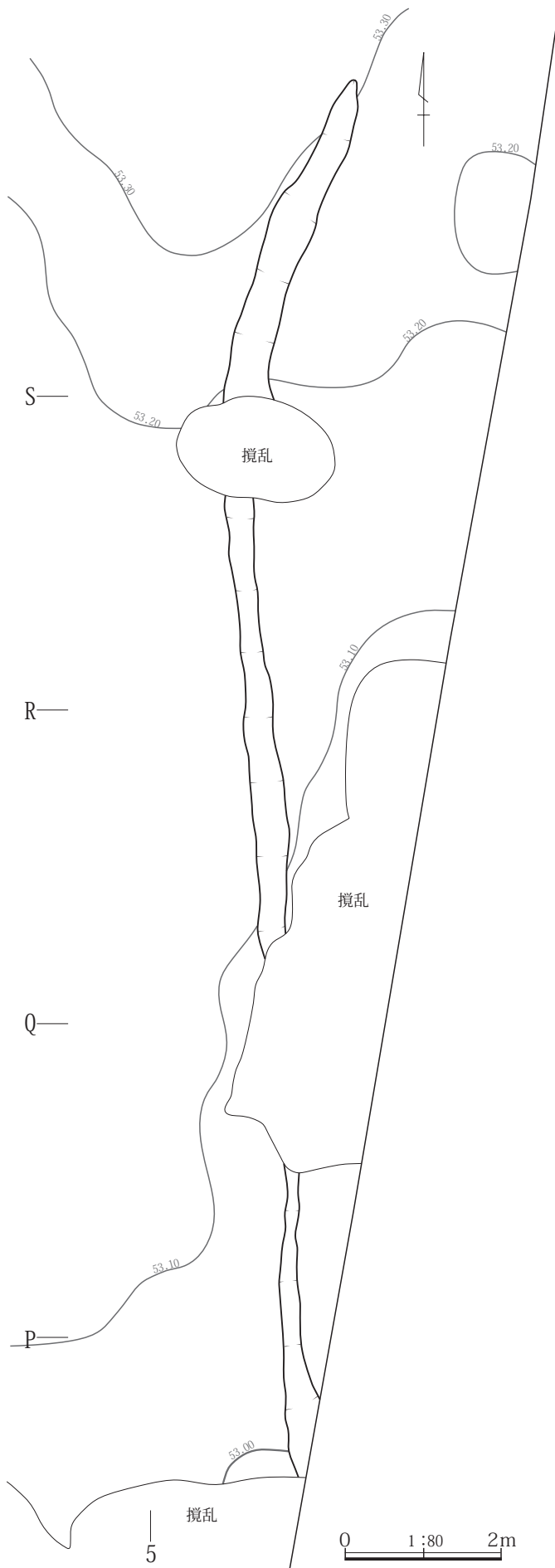
2. 焼土(第11図、PL. 3)

1GのX-3からY-3グリッドにまたがって、1区の第1面調査段階で1か所検出され、1号焼土と命名した。東半はトレンチ掘削で不明だが、残存する西半で50×40以上cmの楕円形の範囲に焼土層が形成されたと推定される。厚さは2～3cmで、ブロック状をなす。炉のような硬化面は確認できない。層土削除によって65×50以上cmの浅い皿状窪みになるが、本来の人為的な掘り込みであるとの確証はない。焼土の下位には地山の黒褐色土がみられることから、この面で一時的に燃焼させたものではないだろうか。6点の土師器片が出土したことと、検出面から古墳時代と捉えておく。

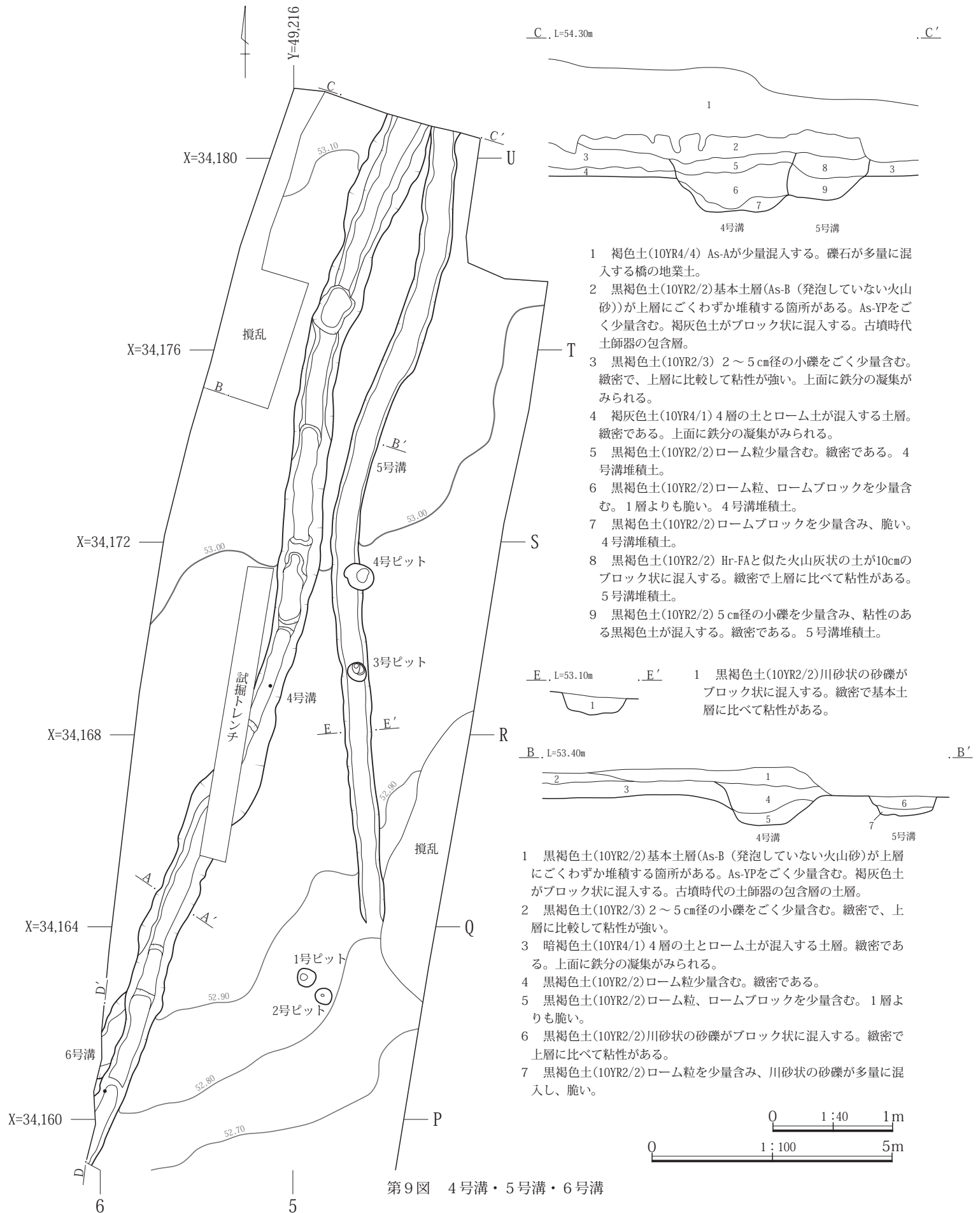
3. ピット

1号ピット(第12図、PL. 7)

3GのP-4グリッド、第2面で確認された。南東に15cm離れて2号ピットがある。平面円形で直径37cm、深さ38cmを測る。堆積土は黒褐色土で下層にはローム塊を含む。底断面はやや丸みを帯び、柱痕跡は確認できない。出土遺物なし。



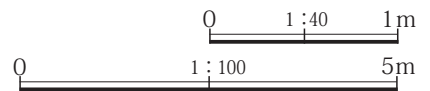
第8図 3号溝の平面確認図



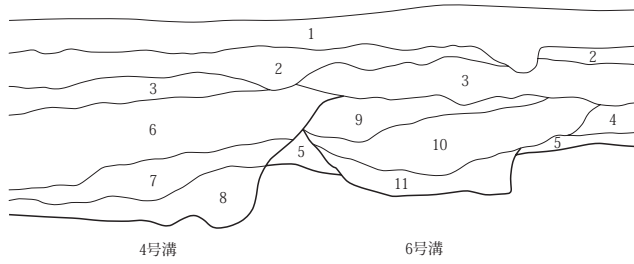
- 1 褐色土(10YR4/4) As-Aが少量混入する。礫石が多量に混入する橋の地業土。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)基本土層(As-B (発泡していない火山砂))が上層にごくわずか堆積する箇所がある。As-YPをごく少量含む。褐灰色土がブロック状に混入する。古墳時代土師器の包含層。
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 2~5 cm径の小礫をごく少量含む。緻密で、上層に比較して粘性が強い。上面に鉄分の凝集がみられる。
- 4 褐灰色土(10YR4/1) 4層の土とローム土が混入する土層。緻密である。上面に鉄分の凝集がみられる。
- 5 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。緻密である。4号溝堆積土。
- 6 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロックを少量含む。1層よりも脆い。4号溝堆積土。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)ロームブロックを少量含み、脆い。4号溝堆積土。
- 8 黒褐色土(10YR2/2) Hr-FAと似た火山灰状の土が10cmのブロック状に混入する。緻密で上層に比べて粘性がある。5号溝堆積土。
- 9 黒褐色土(10YR2/2) 5 cm径の小礫を少量含み、粘性のある黒褐色土が混入する。緻密である。5号溝堆積土。

- E. L=53.10m E' 1 黒褐色土(10YR2/2)川砂状の砂礫がブロック状に混入する。緻密で基本土層に比べて粘性がある。

- B. L=53.40m B' 1 黒褐色土(10YR2/2)基本土層(As-B (発泡していない火山砂))が上層にごくわずか堆積する箇所がある。As-YPをごく少量含む。褐灰色土がブロック状に混入する。古墳時代の土師器の包含層の土層。
 2 黒褐色土(10YR2/3) 2~5 cm径の小礫をごく少量含む。緻密で、上層に比較して粘性が強い。
 3 暗褐色土(10YR4/1) 4層の土とローム土が混入する土層。緻密である。上面に鉄分の凝集がみられる。
 4 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。緻密である。
 5 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロックを少量含む。1層よりも脆い。
 6 黒褐色土(10YR2/2)川砂状の砂礫がブロック状に混入する。緻密で上層に比べて粘性がある。
 7 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒を少量含み、川砂状の砂礫が多量に混入し、脆い。



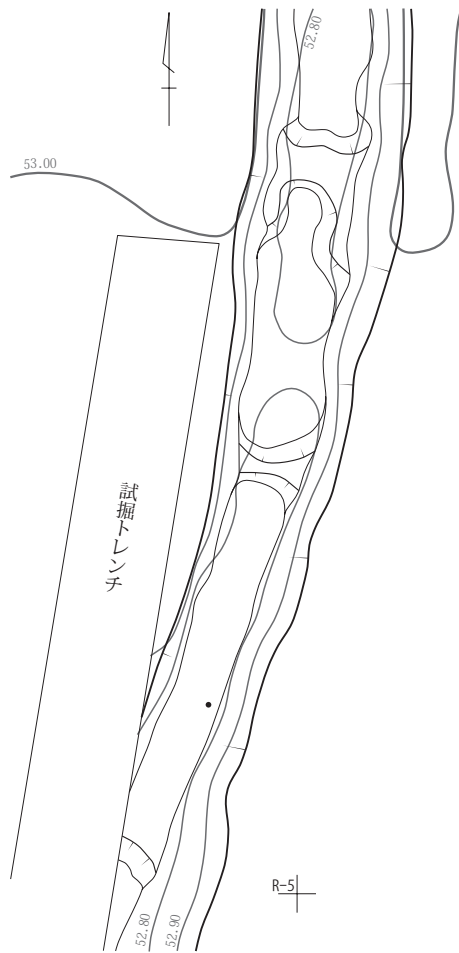
D, L=53.80m



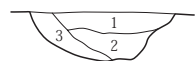
- 1 褐色土(10YR4/4)現耕作土 As-Aが少量混入する。脆弱である。
- 2 褐色土(10YR4/4) As-Aが少量混入する褐色土と黒褐色土(白色の軽石がごく少量混入)が混入する。緻密である。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) As-B (発泡していない火山砂)が上層にごくわずかに堆積する箇所がある。As-YPをごく少量含む。緻密である。褐色土がブロック状に混入する。古墳時代土師器の包含層。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 2~5cm径の小礫をごく少量含む。緻密で、上層に比較して粘性が強い。

D'

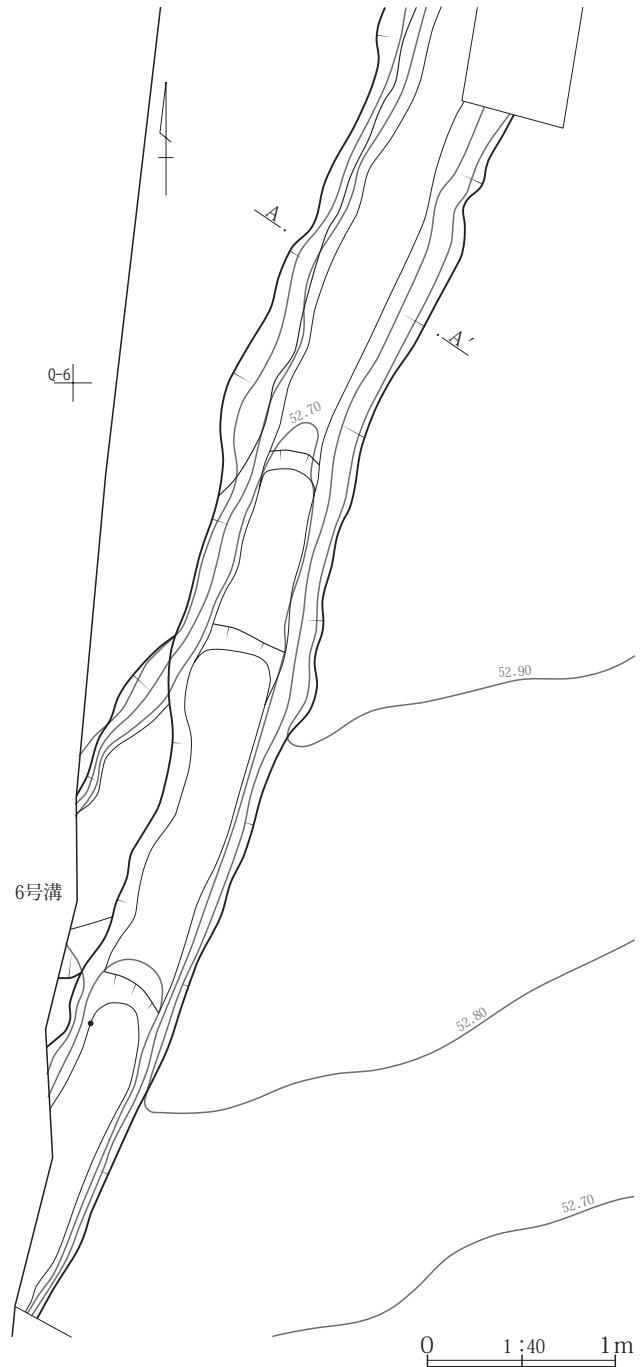
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 4層の土とローム土が混入する土層。緻密である。上面に鉄分の凝集がみられる。
- 6 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。緻密である。4号溝堆積土。
- 7 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロックを少量含む。1層よりも脆い。4号溝堆積土。
- 8 黒褐色土(10YR2/2)ロームブロックを少量含み、脆い。4号溝堆積土。
- 9 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。6層に比べてやや明るい色を呈し、緻密である。6号溝堆積土。
- 10 黒褐色土(10YR2/3)ローム粒をごく少量含む。5号溝覆土より緻密である。鉄分の凝集がみられる。6号溝堆積土。
- 11 黒褐色土(10YR2/3)ローム土が多量に混入する。緻密である。6号溝堆積土。



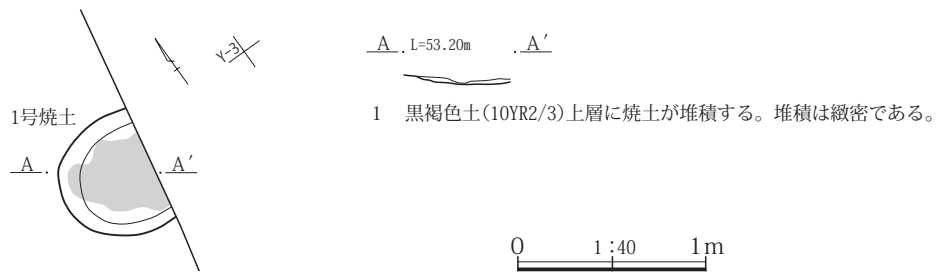
A, L=53.10m



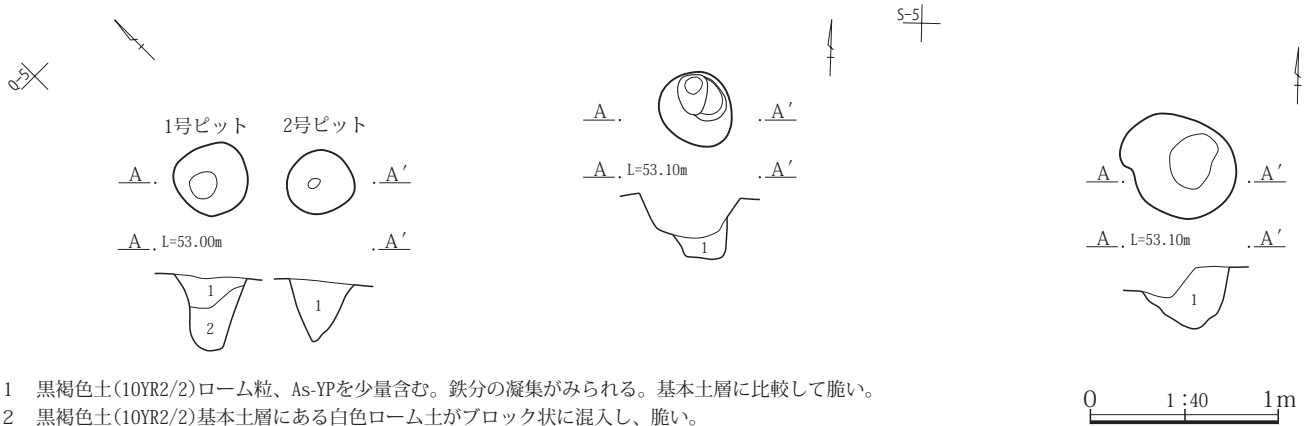
- 1 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒少量含む。緻密である。
- 2 黒褐色土(10YR2/2)ローム粒とロームブロックを少量含む。1層よりも脆い。
- 3 暗褐色土(10YR2/2)ロームブロックを少量含み、脆い。



第10図 4号・6号溝土層断面と4号溝の部分拡大図



第11図 1号焼土



第12図 1号・2号・3号・4号ピット

2号ピット(第12図、PL. 7)

3GのP- 4 グリッド、第2面で確認された。平面円形で直径37cm、深さ32cmを測る。堆積土は単一な黒褐色土。底断面は尖る。出土遺物なし。

3号ピット(第12図、PL. 7)

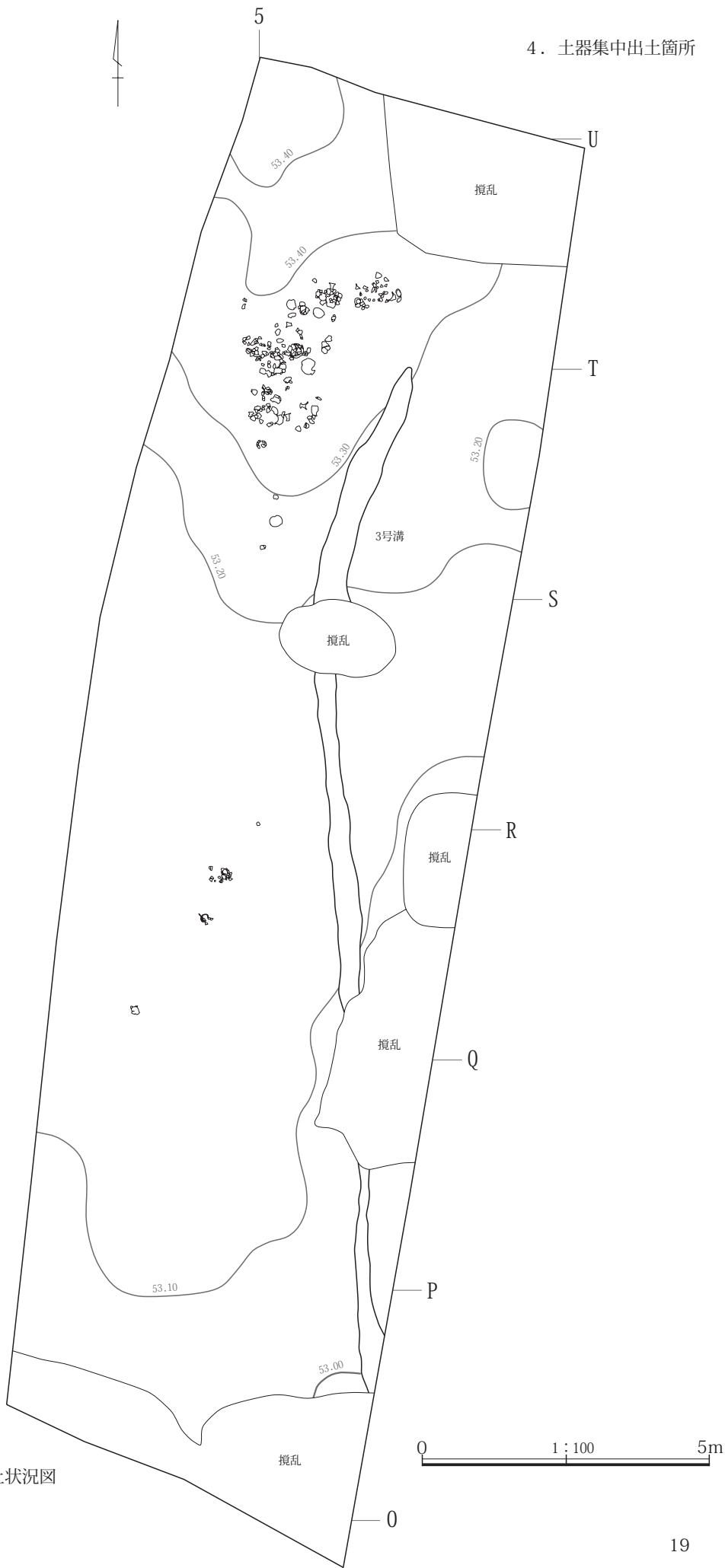
1GのR- 4 グリッド、5号溝内で確認された。径40×36cmの不整形円で、5号溝上端レベルからの比高は59cmを測る。底面は径10cmの円形で断面はほぼ平坦。堆積土は黒褐色土で、出土遺物はない。5号溝との重複新旧関係は不明。

4号ピット(第12図、PL. 8)

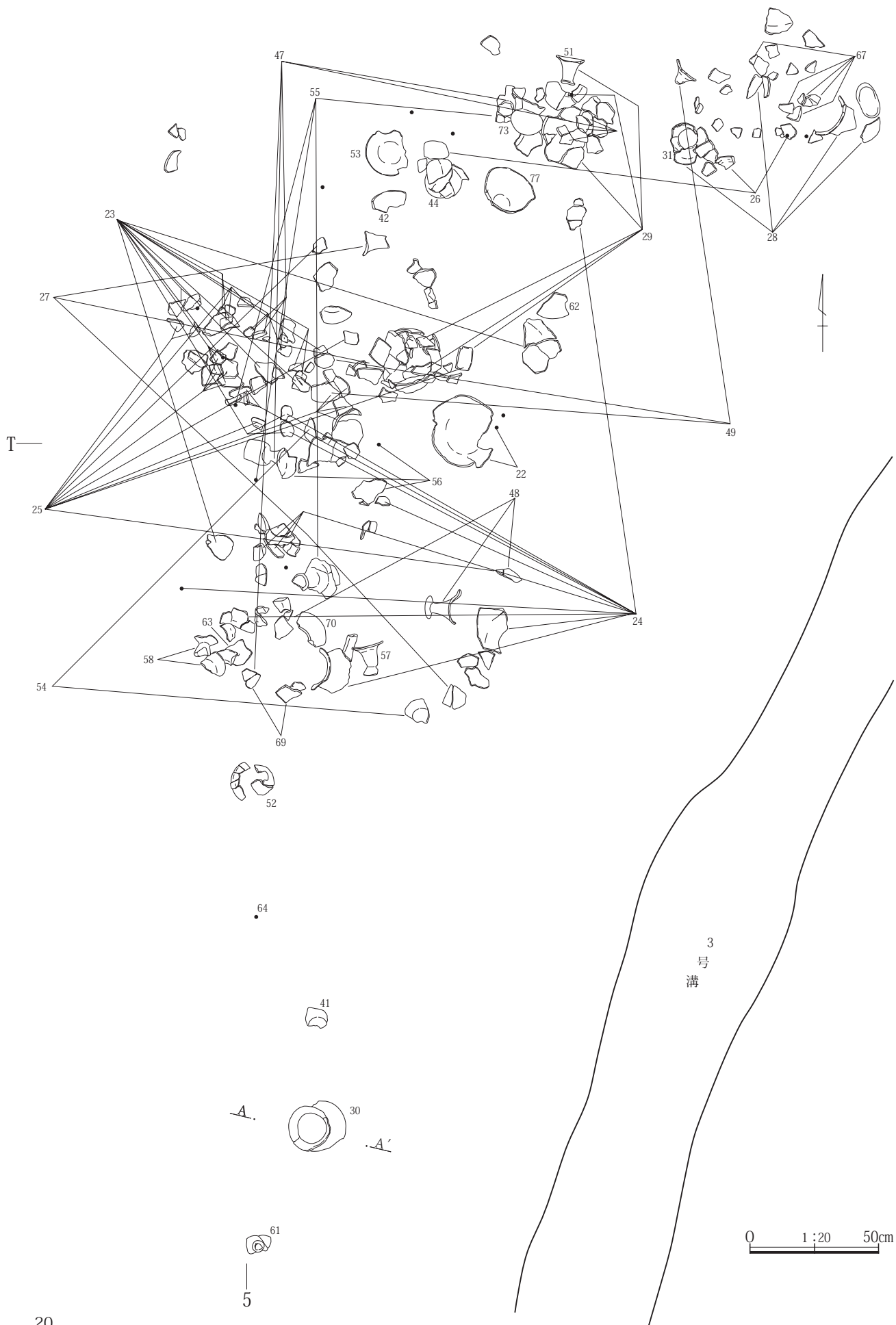
1GのR- 4 グリッド、5号溝内で確認された。径63×50cmの不整形楕円形で、深さは33cmを測る。底面断面は弱いV字状。堆積土は黒褐色土で、土師器小片1点が出土した。5号溝との重複新旧関係は不明。

4. 土器集中出土箇所(第13～16図、PL. 8～10)

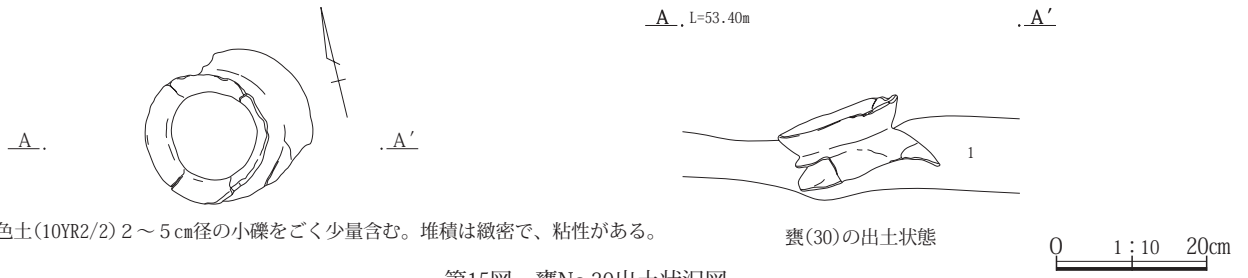
2区の北半から中央付近にかけて、ほぼ2区中軸線に沿った状態で土師器が集中して出土している。出土層位は、基本土層の第3層から4層にかけての黒褐色土層中で、下位に埋没した4号溝堆積層出土破片との接合関係もみられる。平面出土分布が4号溝走向に沿っていること(第13図)からも、4号溝埋没途中の溝状窪みに廃棄された可能性も考えておくべきだろう。土器の接合関係から復元すると、最長で3.0m、多くは1.0～1.5mの範囲内で1個の土器が分散している。出土レベルはほぼ同じで、最大深は20cmであるが、これは土器個体の大きさとも関係する。出土土器は、古墳時代中期の5世紀前～中葉頃の平底甕と高杯が大部分を占める。完形状態のものは見られず全て破損品であるが、復元率が高いのが特徴である。なお、第20図-30の甕は胴下半を欠いた正位で出土しており(第15図)、下端欠損部と口唇破損部が磨滅したように観察できる。口縁から胴上半の比熱色変も著しい。炉内での支脚台代わりに転用されたものか。



第13図 遺物出土状況図



第14図 遺物接合関係図(1)



1 黒褐色土(10YR2/2) 2～5cm径の小礫をごく少量含む。堆積は緻密で、粘性がある。

甕(30)の出土状態

第15図 甕No.30出土状況図



第16図 遺物接合関係図(2)

5. 出土遺物

石器は、1区から頁岩製剥片2点、2区からチャート製石鏃1点(第17図-1)、黒色頁岩製スクレイパー1点(第17図-2)が出土している。出土層位は基本土層3～4層である。区は異なるが、同層位から出土する縄文土器に伴うものと考えておく。

縄文土器及び弥生土器は、1・2区の690㎡に及ぶ調査範囲から、縄文時代中期～後期にかけての土器片826点、弥生時代中期の土器片4点を検出した。それらの大半は、帰属時期の異なる古墳時代の堆積土中から出土したものである。その詳細な内訳は、1区の場合、縄文時代中期の加曾利E 3式2点、同後期の堀之内1式783点、同2式4点、弥生時代中期3点を数える。2区の場合は、堀之内1式75点、弥生時代中期1点を数える。両区ともに、縄文時代の堀之内1式土器を多出する点で共通しており、出土量を重視すれば、調査区外に当該期の遺構が存在する可能性が高い。

以下、時代・土器型式別にその概要を記載するが、整理期間と編集の都合上、1区の縄文土器16点、弥生土器1点の合計17点を掲載した(第18図)。なお、胎土の分類については第3表「遺物観察表」(P27)に基づく。

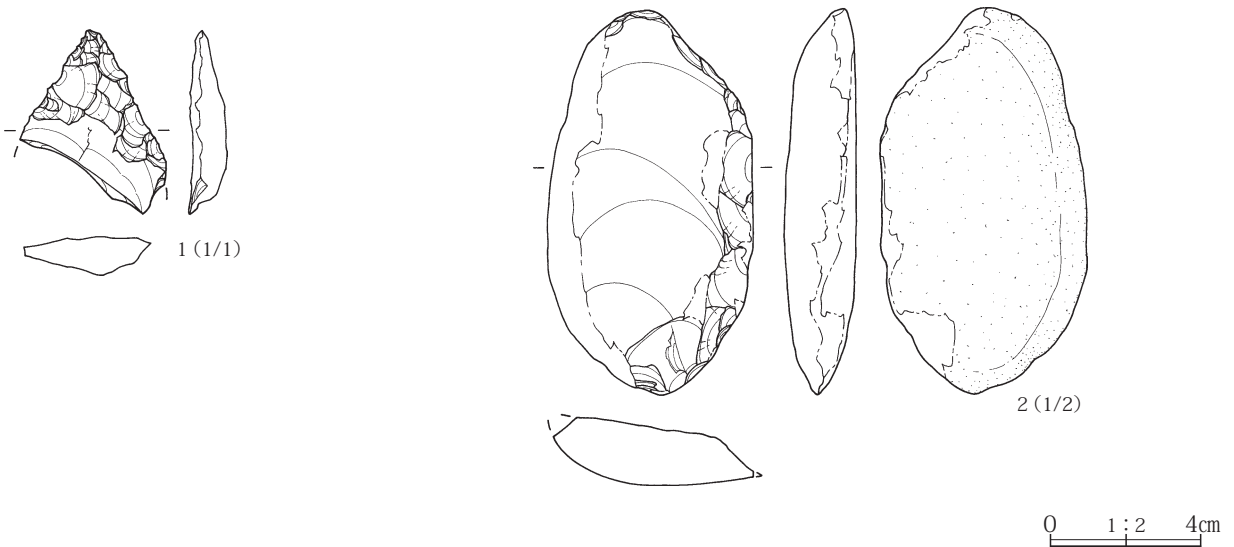
称名寺Ⅱ式土器(第18図3～5) 1区より総数3点が検出されたのみである。単沈線によりJ字状の区画文を施

すが、4・5は区画内に列点状の刺突文を充填的に施文している。胎土は石英や輝石を含むD類が主体的だが、花崗岩起源の雲母を含むA 2類の存在が特筆される。

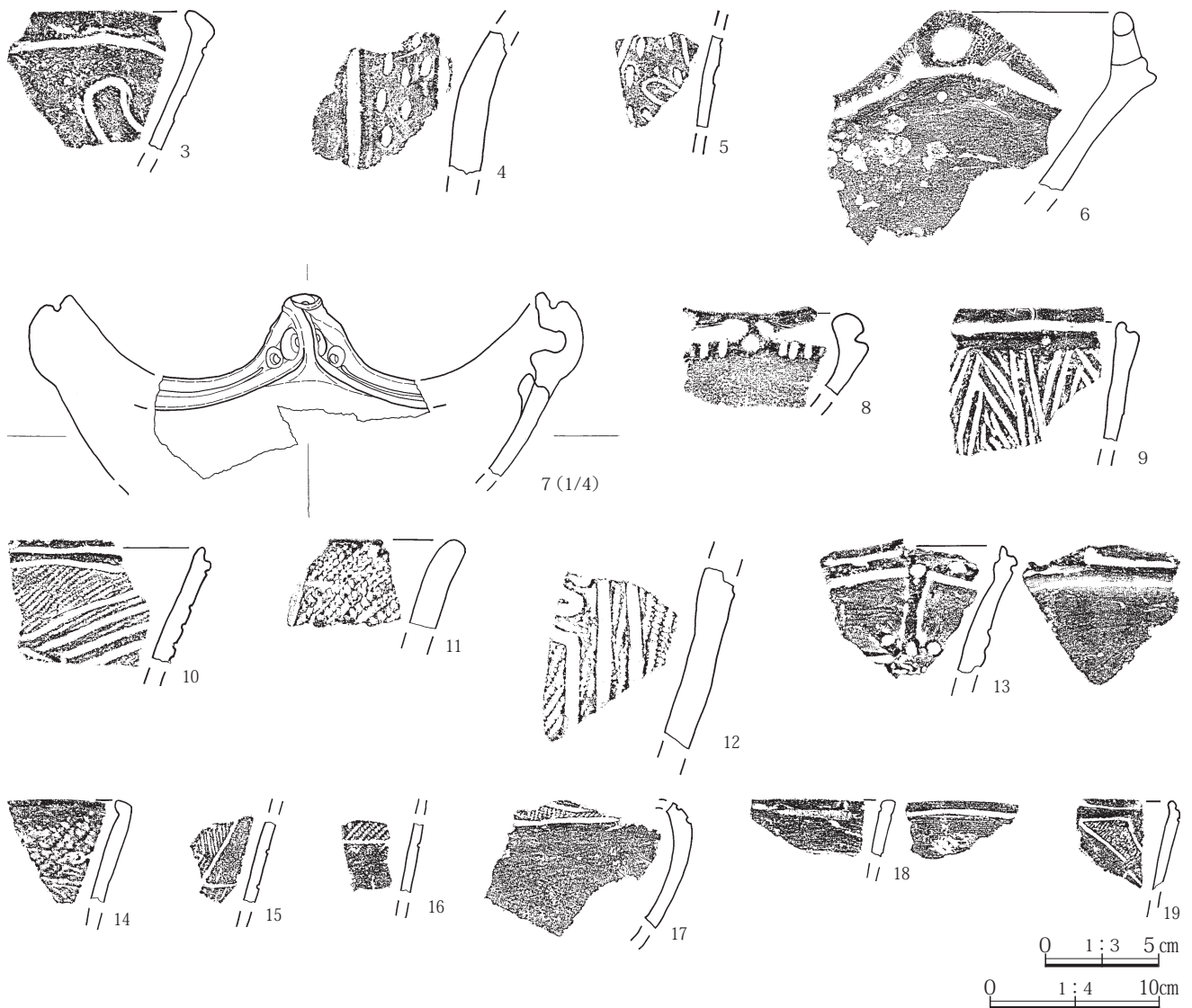
堀之内1式土器(第18図6～12) 1・2区より総数858点が検出された。類型単位で見れば、6～8は頸部に無文部を構成する「小仙塚類型」または「矢太神沼類型」であり、鋸歯状の沈線文を施す9は「荇田類型」、縄文や沈線文を施す10～12は「曾谷類型」に比定されよう。尚、10～12の縄文原体はいずれも単節LRであり、横位施文を基本としている。胎土は、石英・輝石・形質乳白色岩片を含むD類を主体として、花崗岩起源の雲母粒を含むA類や結晶片岩を含むB類が特徴的である。

堀之内2式土器(第18図13～17) 1区より総数9点が検出されたのみである。13は「矢太神沼類型」に系譜を持つ深鉢であり、14はLR縄文を横位・多段にせもんする朝顔形の深鉢と想定される。15・16も朝顔形の深鉢だが、体部上半に幾何学的な文様を施す。17は注口土器と想定されるが、屈曲部を境とした体部上半に渦巻状かあるいは幾何学的な区画文を施すものだろう。胎土はC・D類が主体的だが、雲母を含むA類も認められる。

加曾利B 2式土器(第18図18) 1区より総数1点が検出されたのみである。口縁部内面に1条の横線文を施すが、外面は擦痕状の調整痕が存在する以外は無文であり、加



第17図 石器



第18図 縄文土器及び弥生土器

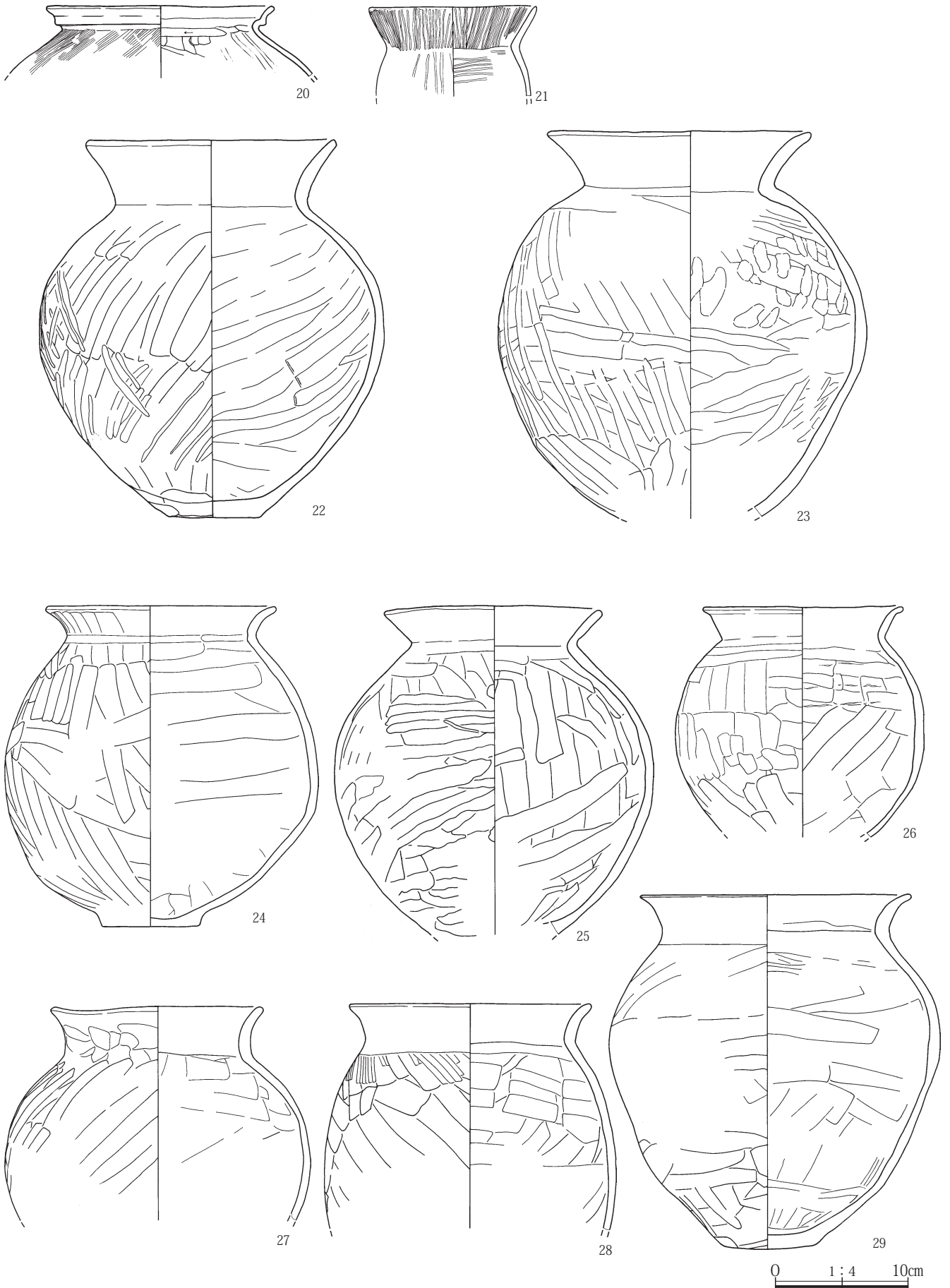
曾利B 2式に比定できるか否か、確定できない。

弥生土器中期中葉(第18図19) 1・2区より総数4点が検出されたのみである。口唇部が外削ぎ状を呈し、入組状の区画内に細密なLR縄文を充填施文している。胎土は、結晶片岩の粗・細砂や同岩石起源の雲母粒を含む特徴的なB類である。

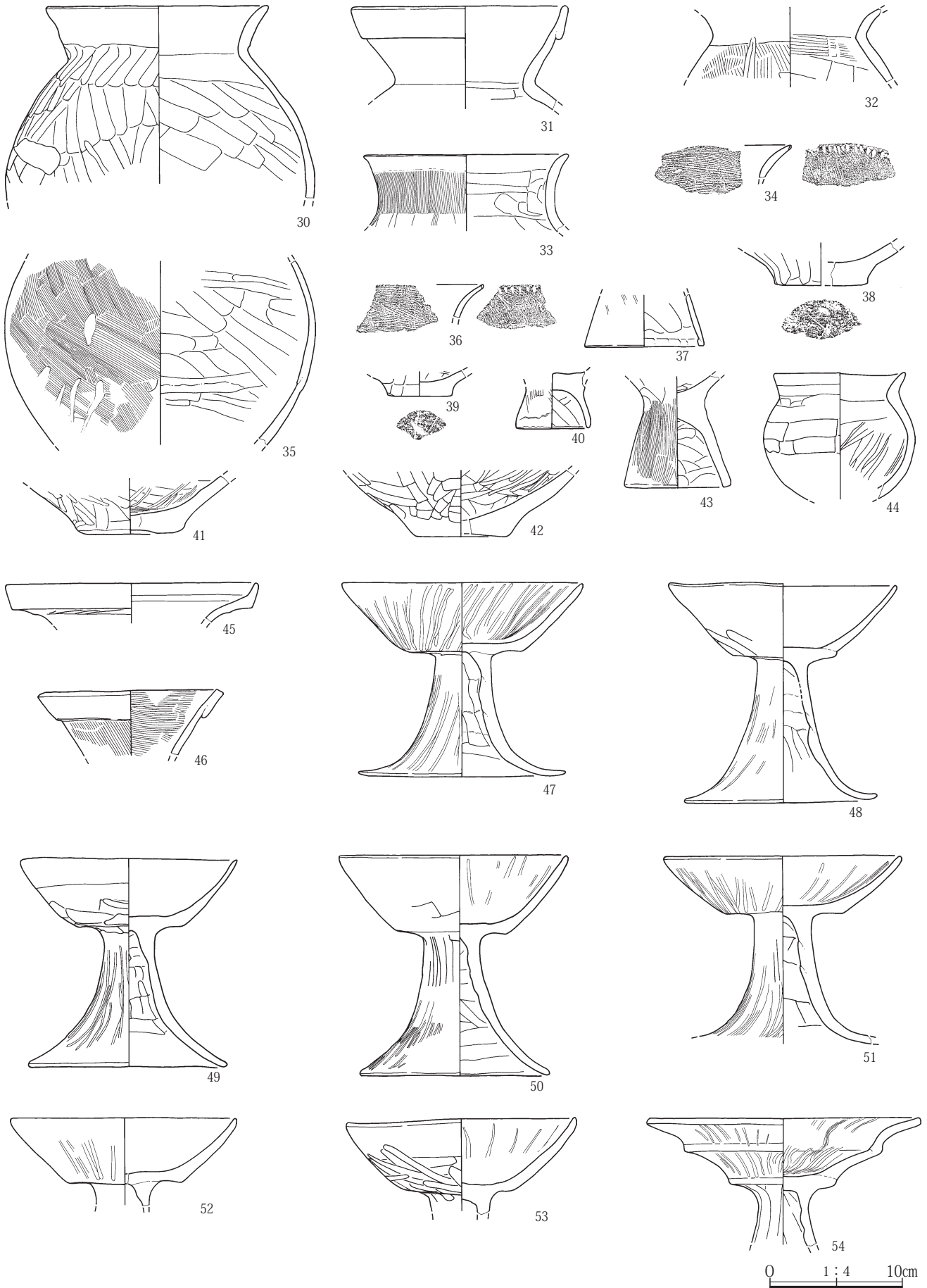
土師器は古墳時代のものに限られ、また須恵器は見られない。出土数量は、図示した80点のほか1231点の破片である。調査区内訳は、1区が図示8点で非掲載151点、2区は図示72点で非掲載1080点となる。時期は古墳時代前期～中期(4～5世紀代)のもので、1区では前期、2区では土器集中出土箇所を含めて中期のものが大部分を占める。前項で述べたように、下位に埋没する4・5号溝の堆積土から出土するものも少なくないと思われるが、これらの遺構との関係は明確でない。なお中期の土

師器において、甕は口頸の形状と整形の特徴から、第19図-22・23が古相で同図-28・29は新相、高杯も脚裾形状から、第20図-49・50は古相、第21図-58・67が新相と考え得る。このことから4世紀末から5世紀前半の時間幅の中で堆積したものと捉えておきたい。

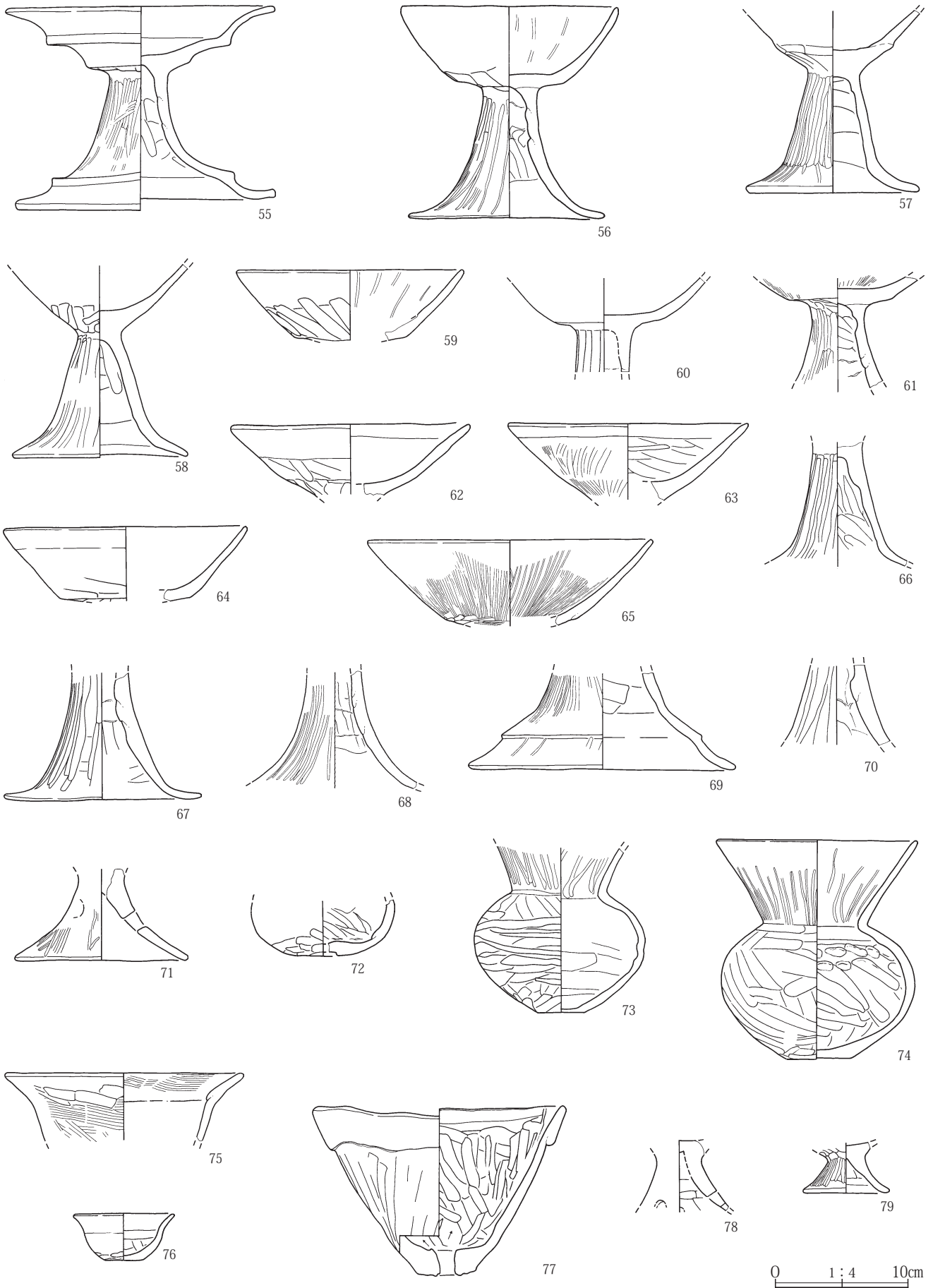
新屋敷前遺跡の調査では、8片の陶磁器類が出土した。いずれも小破片で資料化に足るものはない。1区黒色土包含層から近・現代磁器碗1片、製作時期不詳の瓦3片が出土した。1区試掘トレンチ周辺から江戸時代陶器徳利の破片1片を表採した。2区黒色土包含層から江戸時代陶器碗1片・近・現代磁器小杯1片を、2区遺構外から江戸時代の陶器碗1片が出土した。



第19図 古墳時代の土器(1)



第20図 古墳時代の土器(2)



第21図 古墳時代の土器(3)

第3表 遺物観察表(縄文土器・弥生土器のアルファベット表記による胎土分類は「凡例」による。)

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考		
第17図 PL.12	1	剥片石器 石鏃	2区 1/2	長 幅	(2.4) (2.0)	厚 重	(0.5) 1.6	チャート	表裏面に素材剥片段階の剥離面を大きく残す。右側縁は両面加工であるが左側縁は片面加工である。未成品の可能性はある。		
第17図 PL.12	2	剥片石器 スクレイパー	2区 ほぼ完形	長 幅	10.2 (5.4)	厚 重	(1.9) 126.5	黒色頁岩	表面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。右側縁に片面加工が認められる。裏面は自然面であり円礫を利用する。		
第18図 PL.12	3	縄文土器 深鉢	1区2号溝 口縁部破片					D2	短く「く」字状に内折する口唇部。単沈線によりJ字状の意匠を施す。内外面共に風化。	称名寺Ⅱ式	
第18図 PL.12	4	縄文土器 深鉢	1区 胴部破片					A2	単沈線の区画文を施し、列点状の刺突文を充填施文。内面風化。	称名寺Ⅱ式	
第18図 PL.12	5	縄文土器 深鉢	1区 胴部破片					D1	J字状区画文の外縁に列点状の刺突文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺Ⅱ式	
第18図 PL.12	6	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					A2	環状の小突起を付す波状口縁。口端部に刺突文や横線文を施す。内外面共に横位磨き。	堀之内1式	
第18図 PL.12	7	縄文土器 深鉢	1区 口縁部1/4		27.5			A1	やや粗雑なLR縄文を横位施文し、沈線懸垂文を施す。外面煤炭化物付着、内面やや風化。	堀之内1式	
第18図 PL.12	8	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					D1	口縁部に小突起を付す波状口縁。小突起下に刺突文を施し、口端部に横線文と刻み状の短沈線文を施文。内外面共にやや風化。	堀之内1式	
第18図 PL.12	9	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					C3	口端部に横線文を施し、胴部に鋸歯状の沈線文や懸垂文を施文。内面横位磨き。	堀之内1式	
第18図 PL.12	10	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					D1	口端部に横線文を施す。胴部にLR縄文を横位に施し、複数本の単沈線により斜線文を施文。内面やや風化。	堀之内1式	
第18図 PL.12	11	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					B	8字状の捻転突起を4単位に付す波状口縁。く字状に内折する口端部に刺突文や横線文を施す。内外面共横位磨き。	堀之内1式	
第18図 PL.12	12	縄文土器 深鉢	1区 胴部破片					D3	LR縄文を横・斜位施文し、懸垂文や蕨手状沈線文を施す。外面に煤炭化物付着、内面横位磨き。	堀之内1式	
第18図 PL.12	13	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					A1	口端部や口縁内面に横線文と刺突文を施す。頸部に低平な縦位隆線文、括れ部に刺突文や横線文を施文。内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式	
第18図 PL.12	14	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					C1	口唇部がく字状に短く内折する。やや粗雑なLR縄文を横位施文。内面やや風化。	堀之内2式	
第18図 PL.12	15	縄文土器 深鉢	1区 胴部破片					D1	三角形の区画文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文する。外面風化、内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式	
第18図 PL.12	16	縄文土器 深鉢	1区 胴部破片					D1	沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文する。外面やや風化、内面横位磨き。	堀之内2式	
第18図 PL.12	17	縄文土器 注口土器?	1区 胴部破片					C2	体部上半に曲線文を施し、LR縄文を充填施文する。下半～底部は無文。外面横位磨き、内面撫で状の横・斜位磨き。	堀之内2式?	
第18図 PL.12	18	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片					C4	角頭状の口唇部。内面に横線文を施す。外面口縁部は斜位の擦痕状の調整痕を残し、下位に横線文を施文。内面横位磨き。	加曾利B2式?	
第18図 PL.12	19	弥生土器 甕	1区 口縁部破片					B	外削ぎ状の口唇部に横線文を施す。胴部は入組状の細沈線文を施し、細密なLR縄文を充填施文する。内外面共にやや風化。	弥生中期	
第19図 PL.13	20	土師器 S字状口縁 台付甕	2区4号溝 口縁部～胴部上 位1/4	口	16.8				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。頸部内面にヘラナデ。肩外面は右上から左下にハケ目。内面は横位のナデの上に縦位の指ナデ。	
第19図	21	土師器 小型甕 (埴)	2区4号溝 口縁部～胴部上 位1/3	口	12.4				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は内外面とも横ナデの上に縦位のヘラ磨き。胴部外面はヘラナデの上に縦位のヘラ磨き。内面は横位のヘラ磨き。	
第19図 PL.13	22	土師器 甕	2区 1/3	口 底	18.3 6.8	高	28.4		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は4・5回に分けて斜位のヘラ削り。中位・下位はこの上に粗雑な斜位の磨きに近いヘラナデ。内面は斜横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	肩外面に煤、 内面下にコゲ
第19図 PL.13	23	土師器 甕	2区 口縁部～胴部下 位	口	19.4				粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は上半部に斜位のヘラナデ。下半部上位は横位のヘラ削り。中位はヘラ削りの上に斜位のヘラナデ。下位はヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。上位には指頭圧痕を多く残す。	胴下内面に朽 痕、胴中位煤
第19図 PL.13	24	土師器 甕	2区 口縁部～底部 3/4	口 底	16.9 7.2	高	24.1		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は縦位のヘラナデ後、口唇部直下と頸部に横ナデ。胴部外面は斜位を主体としたヘラ削り。内面は横位のヘラナデとヘラ削りが併存。底部外面はヘラ削り。	肩外面に煤、 胴下位色変
第19図 PL.13	25	土師器 甕	2区 口縁部～胴部下 位	口	16.0				粗砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は頸部直下にヘラナデ。以下は斜横位のヘラ削り。内面は多方向にヘラ削り。	肩外面に吹き こぼれか
第19図 PL.13	26	土師器 甕	2区 口縁部～胴部下 位	口	14.7				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は頸部直下が横位の、上位・中位が縦位を主体としたヘラナデ。下位はヘラ削り。内面は上位が横位のヘラナデ。中位が斜位のヘラ削り。下位がヘラナデ。	
第19図 PL.13	27	土師器 甕	2区 口縁部～胴部 中位1/3	口	15.4				粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。下半部にヘラ削り。胴部外面は斜位のヘラ削り。内面は上位に横位のヘラナデ。中位に一部ヘラ削りを残す。	
第19図 PL.13	28	土師器 甕	2区 口縁部～胴部 3/4	口	17.8				粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は頸部直下にヘラナデ。以下、斜位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ、一部にヘラ削りを残す。	口縁外面に煤

第4章 検出された遺構と遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	底				
第19図 PL.13	29	土師器 甕	2区 3/4	口 底	19.9 6.8	高	26.6	粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は上位と中位下半にヘラナデ。中位の上半と下位にヘラ削り。内面の上半は横位の、下半は縦位主体のヘラナデ。	内面剥離、磨滅。胴外面に煤
第20図 PL.13	30	土師器 甕	2区 口縁部～胴部中位1/3	口	16.4			粗砂粒・細砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ。頸部外面はヘラ削りに近いヘラナデ。胴部外面は上位に斜縦位のヘラナデ。中位は横位のヘラ削り。内面は最上位に横ナデ。以下は斜横位のヘラナデ。	口縁部面に粉圧痕。肩被熱色変
第20図 PL.13	31	土師器 壺	2区 口縁部～胴部上位	口	15.9			粗砂粒・赤色粘土 粒少量/良好/橙	粘土帯付加による折返し口縁。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部外面は磨滅。内面はヘラナデ。頸部の一部にヘラ削り。整形は雑。	
第20図	32	土師器 甕	2区 口縁部～胴部上位片・口唇部欠					細砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のハケ目。内面は横位のヘラナデ。一部に横位のハケ目。	
第20図	33	土師器 甕	2区 口縁部～胴部上位1/3	口	15.0			粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/灰黄	口縁部外面は口唇部直下に横ナデ。以下は縦位のハケ目。内面はハケ目と同じ工具によるナデ。胴部外面は縦位のヘラナデ。内面はヘラナデ・ヘラ削り。	
第20図	34	土師器 甕	1区 口縁部片					細砂粒/良好/灰黄 褐	口唇部部にヘラ状工具による刻目文。外面は斜縦位の、内面は斜横位のハケ目。	36と同一個体か
第20図	35	土師器 甕	1区 胴部片					粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい黄褐	外面は斜縦位の細かいハケ目。下位の一部に斜磨き。内面は斜横位のヘラナデ。	
第20図	36	土師器 甕	1区 口縁部片					細砂粒/良好/灰黄 褐	口唇部部にヘラ状工具による刻目。外面は斜縦位の、内面は斜横位のハケ目。	34と同一個体か
第20図	37	土師器 甕	1区 胴部下位～底部1/4	底	4.8			粗砂粒/良好/明赤 褐	胴部は内外面ともヘラナデ。底部外面に木葉痕。	
第20図	38	土師器 甕	2区 胴部下位～底部1/3	底	7.0			粗砂粒/良好/明赤 褐	胴部外面は縦位のヘラナデ。内面は磨滅。底部外面に木葉痕。	
第20図	39	土師器 甕	1区 胴部下位～底部1/4	底	4.8			粗砂粒/良好/明赤 褐	胴部は内外面ともヘラナデ。底部外面に木葉痕。	
第20図	40	土師器 台付甕	2区 脚台部	脚	5.4			細砂粒/良好/明赤 褐	胴部内面はヘラナデ。脚台部内面はヘラナデ。上位にハケ目、内面は指ナデ。	ミニチュアあるいは蓋摘みか
第20図	41	土師器 甕か	2区 胴部下位～底部1/2	底	8.0			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部外面は中央が凹み、周縁部が輪状を呈する。胴部外面はヘラナデ。一部にヘラ磨き。内面もヘラナデの上にヘラ磨きを重ねる。	
第20図	42	土師器 甕	2区 胴部下位～底部1/3	底	6.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部外面はヘラナデに近いヘラ削り。内面はヘラナデ。一部にヘラ削りの面を残す。	
第20図	43	土師器 台付甕	2区 台部3/4	台	8.0			粗砂粒/良好/にぶ い橙	外面の基部はヘラナデ。台部は縦位のハケ目。内面は斜横位の指ナデ・ヘラナデ。	
第20図 PL.13	44	土師器 小型甕	2区 口縁部～胴部下位3/4	口	9.7			粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。頸部直下に縦位のヘラナデか。以下、体部上半部に横位のヘラ削り。下半部にヘラナデ。内面は縦位の幅の狭いヘラナデ。	
第20図	45	土師器 壺	1区 口縁部片	口	18.7			粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい橙	口頸部は水平近く外反し、上方に屈曲する袋状口縁。内外面とも横ナデ。外面の屈曲部直下はヘラ削り。	
第20図	46	土師器 壺	1区 口縁部小片	口	13.0			赤色粘土粒/良好/ にぶい橙	口頸部は外反気味に開き、粘土帯を付加した折返し口縁。口唇部に面取り。口縁外面ナデ。頸部外面は斜、口頸部内面は横位のハケ目。	
第20図 PL.14	47	土師器 高杯	2区 3/4	口 脚	17.9 15.5	高	14.6	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は内外面ともナデの上に右傾の斜放射状ヘラ磨き。脚部外面は縦位のナデの上にヘラ磨き。裾部は横ナデ。内面は柱状部に縦位のナデ。裾部は横ナデ。	
第20図 PL.14	48	土師器 高杯	2区 3/4	口 脚	17.1 14.2	高	16.6	粗砂粒少量/良好/ 明赤褐	杯部口縁部は横ナデ。下位にはヘラ削り。脚部は柱状部に縦位のヘラ磨き。裾部は横ナデか。内面は柱状部が指ナデ。輪積痕を残す。裾部は横ナデと考えられる。	器面は全体に磨滅。
第20図 PL.14	49	土師器 高杯	2区 2/3	口 脚	16.0 14.6	高	15.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯部は口縁部上位に横ナデ、中位にナデ、下位から底部外面にヘラ削り。内面は口縁部に丁寧な横ナデ。脚部は柱状部にナデの上に縦位のヘラ磨き。裾部は横ナデ。内面は柱状部に縦位の指ナデ。裾部は横ナデ。	杯部内面剥離、磨滅。
第20図 PL.14	50	土師器 高杯	2区 1/2	口 脚	17.0 13.8	高	16.6	粗砂粒少量/良好/ 橙	杯部外面の口縁部は横ナデ。底部近くは斜横位のヘラ削り。内面は放射状にヘラ磨き。脚部は柱状部にヘラ削り。裾部はこの上に縦位のヘラ磨きを重ねる。内面は上半部が指ナデ。下半部は横位のヘラナデ。	器面剥離、磨滅。
第20図 PL.14	51	土師器 高杯	2区 口縁部～脚部2/3	口	17.6			粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/明赤褐	杯部口縁部は横ナデ後、外面は右傾のヘラ磨き。内面は底部中央から放射状にヘラ磨き。	
第20図 PL.14	52	土師器 高杯	2区 杯部3/4	口	16.8			粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい橙	外面はナデの上に縦位の磨きを重ねる。	器面剥離、磨滅。
第20図	53	土師器 高杯	2区 杯部のみ	口	17.2			粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/赤褐	口縁部外面は上位に横ナデ。以下は底部まで斜横位のヘラ削り。内面はナデの上に放射状にヘラ磨き。	内面は剥離、磨滅。
第20図	54	土師器 高杯	2区 杯部～脚部上位	口	20.3			粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	杯部口縁部は中位に稜を有し、外反強く立ち上がる。外面は横ナデの上に縦位のヘラ磨き。内面は底部中央から口縁部に向けて放射状にヘラ磨き。脚部外面はヘラナデの上にヘラ磨きと考えられる。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第21図 PL.14	55	土師器 高杯	2区 3/4	口 脚	20.0 19.2	高	15.5	赤色粘土粒/良好/橙	杯部口縁部は中位に稜を有し、これより上位はさらに外反する。柱状部から裾部への変換点にも稜を有する。杯部底部はへら削り。これ以外は内外面とも横ナデ。柱状部外面は縦位のへら磨き。裾部は横ナデ。脚部内面はナデ、横ナデ。	
第21図 PL.14	56	土師器 高杯	2区 口縁部～底部	口 脚	16.0 14.6	高	15.9	粗砂粒・細砂粒/ 良好/明赤褐	杯部外面は口縁部に横ナデ。底部にへらナデ。内面は口縁部に放射状にへら磨き。脚部は外面に縦位のへら削り後、へら磨き。裾部は横ナデ。内面は柱状部に指ナデ。裾部は横ナデ。	
第21図	57	土師器 高杯	2区 杯部～脚部	脚	12.4			粗砂粒少量・赤色 粘土粒/良好/明赤 褐	杯部外面の口縁部は横ナデ。底部はへらナデ。脚部の柱状部は縦位の磨きに近いへらナデ。裾部は横ナデの上の縦位のへら磨き。内面は柱状部にへら削り。裾部に横ナデ。	杯部内面は剥離、磨滅。
第21図 PL.14	58	土師器 高杯	2区 杯部下位～脚部	脚	13.0			粗砂粒/良好/明赤 褐	杯部外面は口縁部に横ナデ。底部にへらナデ。内面は丁寧なナデ。脚部は縦位のへらナデの上にへら磨き。内面の柱状部は横位のへら削りに縦位のナデ。裾部は横ナデ。	
第21図 PL.14	59	土師器 高杯	2区 杯部片	口	16.8			粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい橙	外面は上半部に横ナデ。下半部にはへら削り。内面はナデの上に縦位のへら磨きを重ねる。	内面は器面剥離、磨滅。
第21図	60	土師器 高杯	2区 杯部～脚部上位					粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	杯部は内外面とも磨滅。脚部外面は縦位にへらナデに近いへら削り。内面は指ナデ。	
第21図	61	土師器 高杯	2区 杯部底部～脚部 中位					細砂粒/良好/にぶ い橙	杯部口縁部は内外面ともへら磨き。底部外面はへらナデ。内面は底部中央から放射状に施す。脚部外面は縦位のへら磨き。内面は指ナデか。輪積痕を残す。	
第21図	62	土師器 高杯	2区 杯部片	口	17.7			粗砂粒・細砂粒/ 良好/明赤褐	外面の先端は横ナデ。以下は斜位のへらナデ。内面は横ナデ。	内面は剥離、磨滅。
第21図	63	土師器 高杯	2区 杯部片	口	17.8			粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	先端は横ナデ。以下は粗雑なハケ目。内面は斜横位のへらナデ。	
第21図	64	土師器 高杯	2区 杯部片	口	18.0			粗砂粒/良好/橙	器面が磨滅しているため調整、観察困難。外面は下位にへら削りか。	
第21図	65	土師器 高杯	2区5溝 杯部1/3	口	21.2			細砂粒/良好/明褐	口縁部は内外面とも縦位のへら磨き。受け部外面はへらナデの上に一部へら磨きを重ねる。	
第21図	66	土師器 高杯	2区 脚部上位～下位					粗砂粒・細砂粒/ 良好/明赤褐	外面は縦位のへら磨きに近いへらナデ。内面は斜縦位に強い調子の指ナデ。	
第21図 PL.14	67	土師器 高杯	2区 脚部	脚	14.5			粗砂粒・細砂粒/ 良好/橙	柱状部外面は縦位の磨きに近いへらナデ。裾部は横ナデ。内面は柱状部に指ナデ。輪積痕を残す。裾部に横ナデ。	
第21図	68	土師器 高杯	2区 脚部上位～下位					粗砂粒・細砂粒/ 良好/橙	外面はへら削りの上に縦位のへら磨き。内面は上位に縦位の指ナデ。下位は横ナデ。輪積痕を残す。	器面やや磨滅。
第21図	69	土師器 高杯	2区 脚部1/4	脚	19.5			粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	脚部は柱状部から裾部への変換点に稜を有し、外反する。外面は柱状部、裾部とも縦位のへら磨きを重ねる。内面は柱状部にへら削りを施す。	内面磨滅。
第21図	70	土師器 高杯	2区 脚部上位～下位					粗砂粒/良好/明赤 褐	外面は縦位のへらナデ。内面は縦位の指ナデ。	
第21図	71	土師器 高杯	2区 脚部裾片	脚	12.6			粗砂粒・赤色粘土 粒・白色鈹物粒/ 良好/淡黄	上位の3箇所円孔を穿つ。外面はナデの上に縦位のへら磨き。内面は磨耗。	
第21図	72	土師器 埴か	2区 体部下位～底部 1/2					粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部は狭小な平底か。中央が凹む。体部外面の上半部は丁寧なナデ。下半部は横位のへら削り。内面はへらナデ。	
第21図 PL.13	73	土師器 埴	2区 口縁部欠損	底	3.6			粗砂粒/良好/橙	口縁部は内外面とも横ナデの上に縦位のへら磨き。胴部外面は上位に縦位のへらナデ。中位に横位のへら削り。下位はへらナデ。底部寄りにへら削り。内面は横位のへらナデ。底部外面はへら削り。	
第21図 PL.13	74	土師器 埴	2区 2/3	口 底	14.8 4.8	高	16.5	細砂粒・赤色粘土 粒・白色鈹物粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ。内外面とも縦位のへら磨き。胴部外面は上位に横位のナデ。中位・下位はへらナデ。一部へら削りに近い部分もある。内面は指ナデ。	
第21図	75	土師器 鉢 (高杯)	1区 口縁部片	口	17.0			粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部の外面は横ナデ・へらナデ。内面は横位のハケ目。体部外面は斜横位のハケ目。内面は磨耗。	器形はやや歪むか。
第21図	76	土師器 小型鉢	2区 破片	底	2.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は斜め上方に向けて外反する。平底。口縁部は横ナデ。体部外面はナデ。底部近くにナデに近いへら削り。内面はナデ。	
第21図 PL.14	77	土師器 有孔鉢	2区 口縁部一部欠	口 底	18.5 4.2	高	12.6	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい褐	口縁部は外側が折り返し口縁状に肥厚する。底部は中央に直径12mmの孔を穿つ。器面はナデ。体部外面は斜縦位にへらナデ。内面は斜縦位のへら削り。	
第21図	78	土師器 器台	1区 脚部上位					粗砂粒多量・赤色 粘土粒/良好/橙	脚に3箇所の円孔を穿つ。脚部外面は丁寧なナデ。磨きが施されているか確認できない。内面はナデ・へらナデ。	
第21図	79	土師器 高杯(ニチュ 7)	2区 脚部3/4	脚	6.0			細砂粒/良好/浅黄 橙	外面の基部はへらナデ。脚台部は縦位のへら磨き。内面は横位のへらナデ。	

第5章 まとめ

新屋敷前遺跡は、昭和45年に遺跡北端での偶然の発見を契機とした発掘調査で、縄文時代後期の住居跡を確認しており、珍しい革袋を模した舟形の注口土器が出土した(文献1)。これとは別に、農作業中の発見として古墳時代前期の壺2点が採集されている(文献1)。第22図に掲載した土器が以上の3点である。さらに平成16年の町道工事に伴う調査では、北東辺で古墳時代住居跡が確認された(文献2)。いずれも今回の調査地点より東側の微高地上にある。今回の調査地点では、古墳時代と思われる溝4条と、後期縄文土器と古墳時代前～中期の土師器が出土した。このことから、新屋敷前遺跡の本体が東側の微高地上に中心を置く縄文後期及び古墳時代前～中期集落址であり、今回調査地点はその西限地域にあたり、かつ居住域から外れた外縁部と位置づけられる。

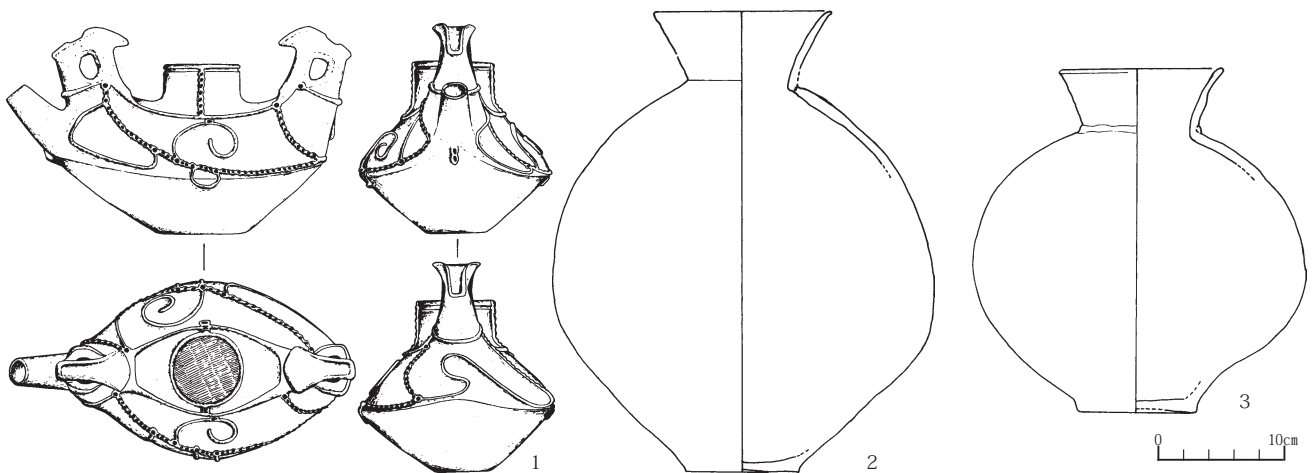
調査で検出された4条の溝は、いずれも微高地西縁に沿って南北方向に走る。調査区西側は石田川の旧流路が埋没した谷低地なので、より北側の石田川上流部から取水した灌漑水路との可能性が考えられよう。開削時期は確定できなかったが、埋没土と土器出土状況から古墳時代前期に遡ることは十分に予測できる。ただし、集中出土した5世紀代の土師器群の埋没が、4号溝の堆積土層上位であったことから、4世紀末までには埋没していた可能性が高い。ここで集中出土した5世紀代の土師器群は、ほぼ甕と高杯が大部分を占め、比較的復元率が高いこと、約5mの範囲にまとまって廃棄された状態を示すことから、通常の集落遺跡における破損品の廃棄というより、祭祀に用いた土器の廃棄を推測したい。ただし、

甕では外面の煤や内面コゲ及び胴下半部の被熱色変が見られることから、煮炊きに用いたことが明らかである。湧水地にほど遠くない石田川岸であることから、水辺の祭祀に関わる痕跡とも考えたいが、周辺集落遺跡の様相を含め総合的に検討すべき機会を待ちたい。

本遺跡周辺を含む群馬県東南部の太田市から伊勢崎市は、古墳前期段階から急激な低地開発が進んだと考えられている。その担い手集団がS字状口縁台付き甕を主要煮炊き具とする東海西部の勢力か否かは不問としても、新たな技術と労働力の集中をもって大土木事業となる水田開発を行ったことは間違いないだろう。古墳時代前期における当地域の開発の様相は単純ではない。出土した土器相を見ても、埼玉県中～北部からの吉ヶ谷式系(台遺跡、下田中遺跡他)、在来の樽式系(下田中遺跡他)、南関東～東海東部系(北宿・観音前遺跡、重殿遺跡他)、東海西部系(新屋敷北遺跡他)、北陸系(重殿遺跡、下田中遺跡他)が混在する。4世紀以降は概ね東海西部系の土器様式に齊一化されるのだが、古墳前期当初段階ではこれらの土器群が錯綜しており、距離の遠近を問わず、他地域集団が大きく関与したのは間違いない。また前六供遺跡で確認された40m大の前方後方墳から、既に中小クラスの地域統率者が存在していたことも注目だ。このような統率者に率いられた寄せ集め集団が地域水田開発を進めていったとの仮説設定も可能ではないだろうか。

参考文献

- (1)新田町誌刊行委員会ほか1987『新田町誌 第二巻資料編(上)』
- (2)新田町教育委員会2005『新田町内遺跡Ⅶ』



第22図 新屋敷遺跡出土採集資料

報告書抄録

書名ふりがな	あらかしきまえいせき
書名	新屋敷前遺跡
副書名	平成29年度社会資本総合整備(防災・安全) (一)石田川(上流工区)河川改修工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	642
編著者名	齊田智彦/石坂茂/津島秀章/徳江秀夫/大木紳一郎
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20180315
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	あらかしきまえいせき
遺跡名	新屋敷前遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにったまちおおね
遺跡所在地	群馬県太田市新田町大根702-1ほか
市町村コード	10205
遺跡番号	N0048
北緯(世界測地系)	361823
東経(世界測地系)	1391706
調査期間	20171001-20171031
調査面積	690㎡
調査原因	社会資本総合整備(防災・安全) (一)石田川(上流工区)河川改修工事事業
種別	その他
主な時代	古墳/縄文
遺跡概要	古墳-溝4+焼土1+土器集中/縄文-遺物包含層/時期不明-ピット4
特記事項	祭祀に用いられた可能性のある古墳時代土器群
要約	連続する東側微高地に分布する縄文後期及び古墳前期～中期の集落址の西端縁辺部分と考えられる。検出された溝4条は古墳時代前期に開削された灌漑水路と推測される。

写真図版



1 発掘調査地の状況(北から)



2 矢太神沼の現況(北から)



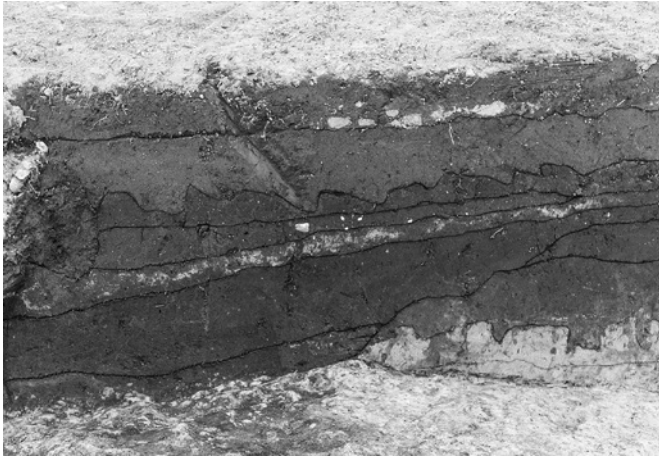
1 1区1面全景(南から) 左側に沿う石田川



2 1区基本土層 No.1



3 1区基本土層 No.2



1 1区1号溝土層断面



2 1区1号溝調査状況(南から)



3 1区2号溝土層断面(東壁)



4 1区2号溝(南から)



5 1区1号溝(南から)



6 1号焼土断面



7 1区2面全景(北から)



8 1号焼土除去面



1 2区2面全景(北から) 右が4号溝、左が5号溝



2 2区3号溝検出状況(南から)



3 2区3号溝土層断面



4 2区3号溝調査状況



5 2区4号溝検出状況(南西から)



1 2区4号溝全景(南東から) 右は5号溝



2 2区4号溝全景(北から)



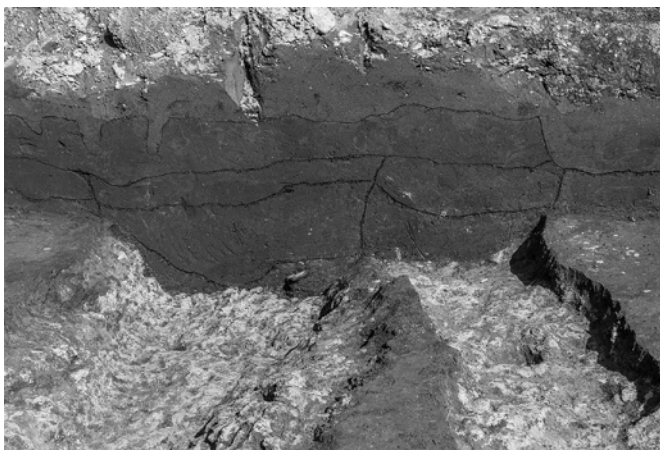
1 2区5号溝(南から) 左は4号溝



2 2区4号溝土層断面B-B'と土器出土状況



3 2区4号溝土層断面A-A'



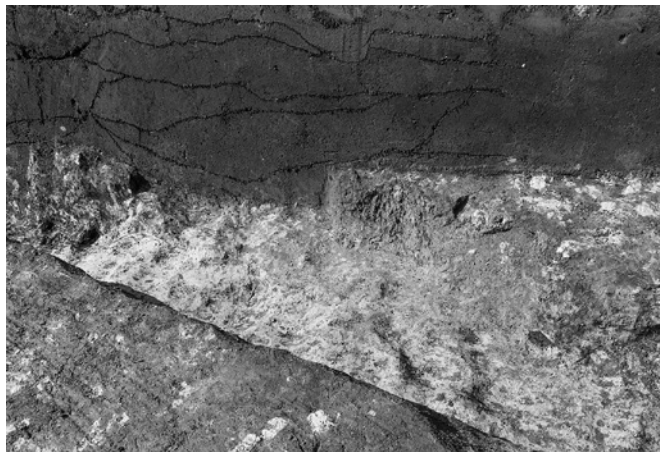
4 2区4号溝・5号溝土層断面C-C'



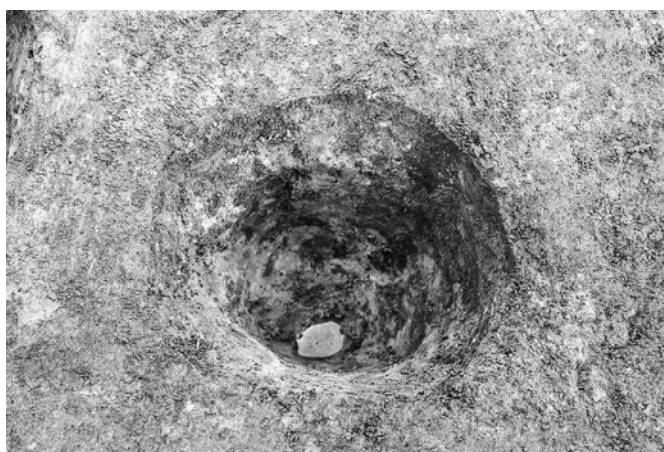
5 2区4号溝・6号溝土層断面D-D'



1 2区5号溝土層断面E-E'



2 2区6号溝土層断面D-D'



3 2区ピットP1



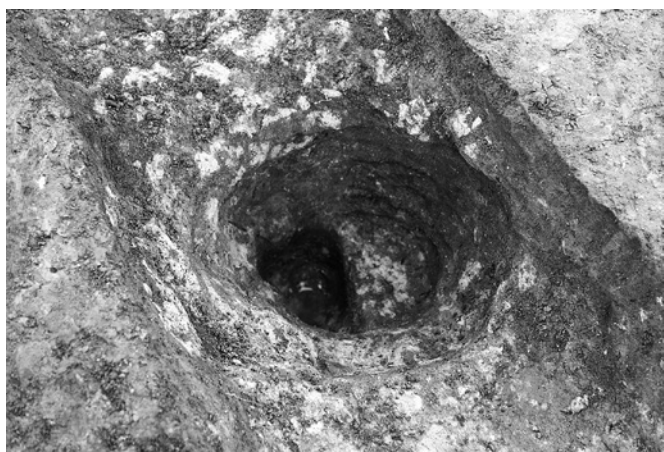
4 2区ピットP1土層断面



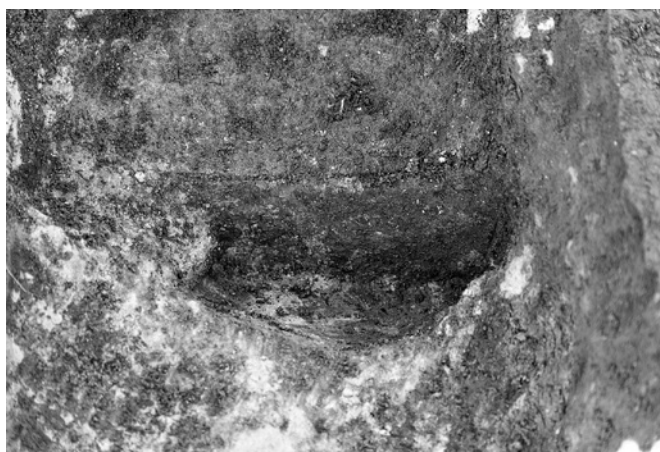
5 2区ピットP2



6 2区ピットP2土層断面



7 2区ピットP3



8 2区ピットP3土層断面



1 2区ピットP4



2 2区ピットP4土層断面



3 2区土器集中出土箇所(西から)



4 2区土器集中出土箇所調査状況



5 2区土器集中出土箇所(北から)



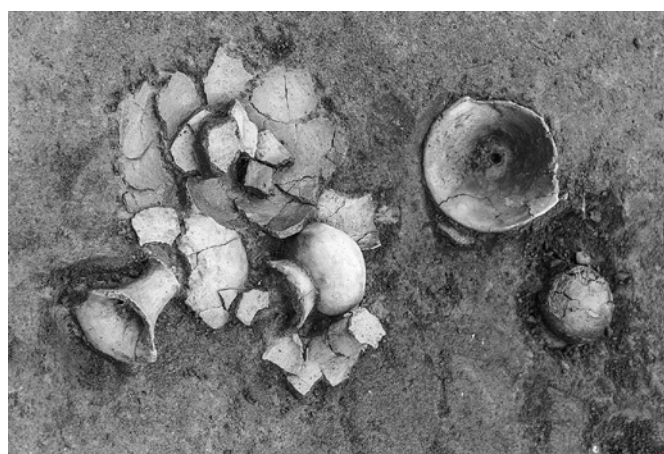
1 2区土器集中出土箇所北半(東から)



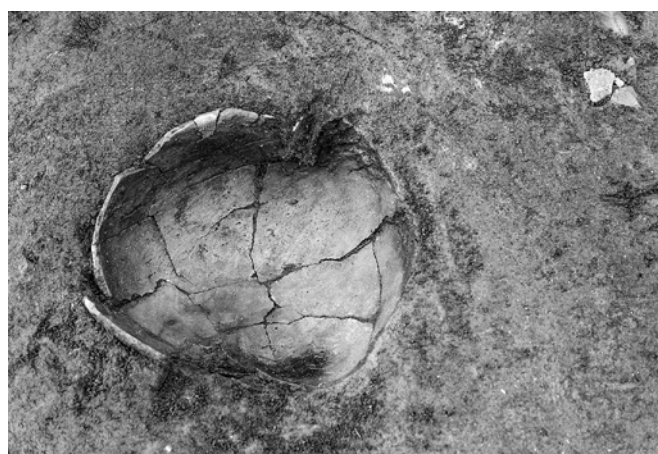
2 2区No.26・28・49・67出土状況



3 2区No.27・42・44・53・73・77出土状況



4 2区No.29・47・51・73・77出土状況



5 2区No.22出土状況



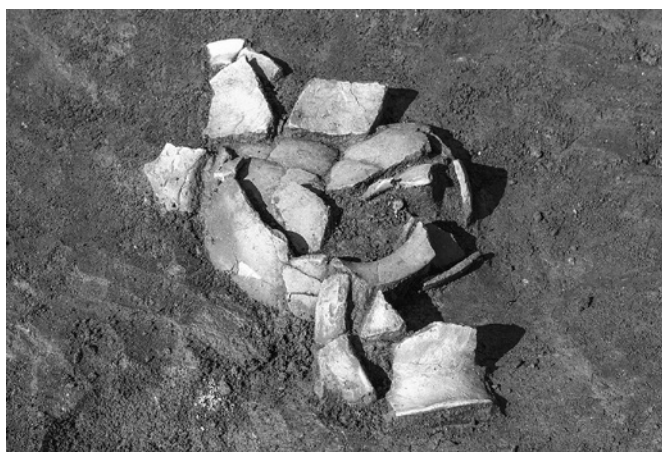
1 2区土器集中出土箇所中央(南から)



2 2区No.24・48・55・57・69・70出土状況



3 2区No.24・27・48・54出土状況



4 2区No.27・29出土状況



5 2区No.58出土状況



1 2区No.30出土状況と断面



2 2区No.30出土状況



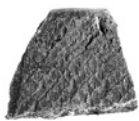
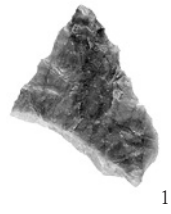
3 2区No.25・49出土状況



4 2区No.52出土状況



5 2区No.61出土状況





古墳時代の土器(No.20・22～31・44・73・74)



47



48



49



50



51



52



59



55



56



77



67



58

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第642集

新屋敷前遺跡

平成29年度社会資本総合整備(防災・安全)(一)石田川(上流工区)
河川改修工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30(2018)年3月8日 印刷

平成30(2018)年3月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社

